
本から始まる新たな世界

叶夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本から始まる新たな世界

【Nコード】

N2461I

【作者名】

叶夢

【あらすじ】

本屋に寄った『柊吉夜』。とある本に目を留めた。面白そうだと開いてみると……。

鈍感主人公は自分のカッコよさに気づいていません。

プロローグかなー。(前書き)

人生初の小説ですw

これはプロローグです。今日中に一話更新します。

感想、評価どんどん聞いて、自分の世界を書いていきます。

プロローグかなー。

みんなに聞いて欲しい。

本屋に寄ってから始まった俺の物語……。

あ、まず自己紹介からしておくと、俺の名前は

『柊 吉夜』だ。

吉夜って呼んでくれ。

さっ、それじゃあそろそろ始めようかな。

プロローグかなー。(後書き)

書き直し始め《11月23日》

一話 　　く新たな世界く（前書き）

書き直しをした日付はあとがきに書いておきます。

一話 　　〈新たな世界〉

『おつ、こんなところに本屋あつたんだ!!』

今までこんなところで本屋を見たことなんてなかったんだけどなあ
…。

いま、俺がいるのは入り組んだ路地の先にある、廃れた本屋。

でっかく《本屋だよ》という看板がある。

まあ、誰だつてこんな自己主張の激しい本屋、目に留まるけど。

いまは平日の午後1時ごろ。

この時間、特別なことがなければ、普通の学生は学校で授業を受けている。

ちなみに、16歳の高校生である『柊杏夜』はいま、この時間に学校の外にあるこの場所に立っている。

その理由はひとつしかない。

そう、サボりだ。

杏夜は毎日の学校がつまらないわけではない。

かと言って楽しいわけでもない。

つまらなくもなく、楽しくもない毎日が続く。

それに飽きたのだ。

だから、晝夜はときどきサボってしまっ。

いつもは友達とサボるのだが、今日はいない。

早くも単位が足りなくなったらしい。

そんな友達をばかだなあと感じつつ、晝夜は本屋の戸に手をかけた。

ガラガラガラっ！！

戸を開けると同時にほこりが舞うのが目に見えた。

店の中はほこりっぽかったが、大きな本棚が3つあり、さまざまな本が並んでいた。

まあ、これくらい本があれば午後まで時間をつぶせるか。と思っ
ていると

『いらっしやい』

奥からしわがれた声が聞こえ、そっちを見ると白髪頭のおばちゃん
がいた。

…さすが、こんな大通りから離れたところに店を構えている人だ。

時代を感じさせる顔。

しかし、その顔がなんとも不気味。

(どれだけアンティークなんだよ…。)

そんな人類の宝であるばあが一言

『兄ちゃんいい男だねえ、アタシが10年若かったら・・・どうだいまからアタシとホト・・・』

『全力で結構です!!!!!!』

その顔でなんてこと言いやがるっ!!!

俺はゲンナリとして、自分の容姿について考える。

俺はそんなにカッコよくないのにどうしていつも。

と小声で言うが、実際は違った。

昔夜が気づいていないだけで、目は鋭くもやさしさを感させる二重。

鼻もすっとしていて、背も高く、痩せていたが、それでいて筋肉質だった。

髪の毛は茶色だが地毛、髪は少し長めだが、爽やかな感じだ。

うん、イケメンだね。

作者は殺意を抱くよ！！！！

『それよりおばちゃん、なにかいい本ない？』

俺は最近入荷した本なら人気な物があるだろうと思って聞いてみた。

『あるある。ここにエロ・・・冗談じゃよ。右の棚から探してみたらどうじゃ？古いが良い本ばかりよ。』

俺は入荷した本を聞きたかったんだけど…という言葉が出かかったが、そんな言葉を飲み下し、右の棚に目を向ける。

たしかに、古そうな本だが、棚とは違い、本はほこりを被っていないかった。

『さんきゅー』

感謝の言葉を口にし、本を探し始める。

(最近マンガばかりだからたまにはこういつのも…)

などと考えながら。

本を探し始めて約5分ほど、その間にさまざまな本を見つけた。

さすがに古いだけのことはある…と誰もが思うような本もあった。

そんな中で昔夜はある一冊を見つけた。

『新たな世界を… か、面白そうだな』

そう思い、手にとって読み始めた。

すると、一番最初のページに

「主は新しい世界を見たくはないか？もし見たければ力をやろう。
主が新たな世界で生きていくための力を…」

と書いてあった。

その下に

見たい

見たくない

10

そう書いてあった。俺はなにかに操られるように”見たい”を人差し指で撫でてしまった。

指が自然に動いてしまったことにき夜は動揺しかけた。

その瞬間、頭の中で

『よかろう、では行こうか。』

という声が聞こえた。

次の瞬間、俺の視界が真っ白な光に満たされ、俺はゆっくり意識を

声に出して、状況を確認する。

そうしなければ、思い出すことさえできないほどに動揺していた。

そして、晝夜は飛び起きた。

『俺は違う世界へ飛ばされたのか?!?!?!?』

すると、近くでがさつとする音がした。

そちらを見るとそこには不思議な服を着た女の人があった。

『どうしました?? なにか、鈍い音がしたので駆けつけたのです
が…』

俺はその女性をよく見る。

上から85、56、80。うん、嘘だ。俺にそんなことがわかる特
技はない。

でも、出るところは出て、締まるところは締まっている。

髪の毛は肩にかかるくらいで、雪のような白銀だ。目はくりっとし
ていてリスのようだ。

背は160cmくらいでとても可愛い。

こんなときにこんなことを考えてしまうなんて…男の性さがにため息を
しっつ

『大丈夫です。　少し、鍛錬をしていて…』

鍛錬??と突っ込まれないうちに自己紹介をしておこう。

『俺は、柊吉夜です。あなたの名前は?』

『私は白矢雪菜はくやゆきなです。』

向こうは少し俺を警戒している。手に持った杖のようなものをこちらへ向けているからだ。

改めて周りを見してみる。こんどは視界を若干下に向けて。

そこには草原が広がっていて、その先に都市のようなものが見える。

そして、やはり空には青い月。

『よろしくお願ひします。　この世界に日本、という街はありますか?』

俺は異世界なのでは?という疑問を取り除くため、勇気を持って聞いてみる。

『ニホン…ですか?　私は聞いたことはないですけど…』

この答えで確信に変わってしまった。

俺は、異世界にきたんだ。

否、来れたのだ。

『そうですか、雪菜さんは魔法とかを使うのですか？杖をこちらに向けていますが…』

形が攻撃に向いていないので、異世界Ⅱ魔法というRPGの思考から聞いてみた。

『あ、杖を向けたままでしたね。すみませんでした』

杖を上に向け、手を顔の前でパタパタしている。

そうやって謝る雪菜さん。可愛いー！！

『私はブルメルに住んでいるハンターです。よろしくお願いしますね』

丁寧に謝儀をしてくれるので、俺もあわててお辞儀を返す。

『き夜さん、ケガはしていませんか？？』

再び、心配してくれる雪菜さん。

『ちょっと肘を切っちゃっただけですから』

テレながら頭を掻いているフリをする。

そのとき雪菜さんがポフッと音をたて顔を真っ赤にした。

『そ、そうですか／＼／＼』

照れている杏夜が可愛くて赤くなつたとは言えなかつた。

『俺、道に迷つてしまつて、泊まるところを探したいのですが……ここから町までどう行けばいいか教えてもらえますか??』

俺がそう言つと、雪菜さんは微笑みながら

『もしよかつたらブルメルの街へ行きませんか？ 町に着けば簡単な手当てもできますし、泊まるところも探せます』

雪菜に連れられて歩き出す。

杏夜は雪菜に感謝しつつ、ブルメルの町を目指す。

雪菜の白銀の髪が描く道を辿りながら。

一話　　く新たな世界く（後書き）

書き直して大変だあ。

《11月23日》

二話 〽再会〽 (前書き)

11月28日編集

二話 　　～再会～

俺と雪菜は他愛もない話をしながら歩いてようやくブルメルの町についた。

30分ほどの道のりを二人で話しながら歩いていたので、打ち解けてきた。

同じくらいだから敬語をつけないでください。と言われたので、敬語は使わないようにしているのだが、雪菜は敬語をはずさない。

理由を聞いたら、彼女にとって敬語を使うことがフォーマルで外すと話しにくいそうだ。

なんとも厄介。

まあ、結論を言えば、そんな感じの仲になったんだ！！

それじゃ、ブルメルの町を紹介しましょう。

建物がたくさん並んでいる。日本で言うと東京みたい。

しかし、日本と違うところがある。

あれ、なんだろう。

日本にはないよなあ…。教科書で見たことがあるくらいだ。

町の中心に大きな建物。

しかも、西洋風の大きなお城のようなものが建っている。

『なあ雪菜、あそこにお城が建ってるけど、王様でも住んでるのか？』

『はい。でもき夜さん。そんなことも知らないなんて、本当にこの辺の人じゃないんですね』

『ん……ああ、そうなんだ。だから、雪菜に会わなかったらちよつと危なかったな』

はははと乾いた笑いをこぼす俺。

あー、元の世界に戻りたい気持ちとこの世界を楽しみたい気持ちが混ざって疲れる……。

俺がそういつと雪菜はまた歩き出した。

そして、突然止まると

『ここなんてどうでしょう？』

雪菜の指の先を見ると、CROWと書かれた看板がぶら下がっていて、古そうだが、不思議と嫌悪感を感じなかった。

『なにが、どうでしょう？ なんだ？？』

突然、どうでしょうって言われても……。

雪菜の家なのかな??

『もう、最初に宿をって言ったのはき夜さんですよ?? ひどいですよ』

雪菜はほっぺをぶくつと膨らませてすねている。

『悪い!! 雪菜と話すのが楽しくてつい忘れてたっ!!』

『…そういうことなら許しますけど…それで、ここが私のオススメの宿なんですけどどうでしょう??』

『雪菜のオススメなら迷わず今日はここに泊まるよ。ありがとな。』

『いえいえ。では、私はまた、明日の夜最初に会った草原にいると思うので、明日来てくださいね。それでは、おやすみなさい。』

そんな言葉を残して雪菜は走っていった。

また明日の夜…か。今日はいろいろありすぎて疲れた。

もう、寝たい。

そう思って宿の扉を開けた。

ギギイーーー。

『いらっしやい』

『本屋のばばあ?!?!?!?!?!』

そこには白髪頭のおばちゃんがいた。

元の世界で見たばばあー！ たしかにあのばばあじゃねー

『なんじゃい初対面でやぶから棒に。失礼じゃろつて。』

あれ?? 初対面?? じゃあ違うのかな??

『あ、ごめんなさい。』

『しかし、いい男じゃのお。わしが10年若かったら。どうじゃ、このあと…』

『言わせねーよ!?!?!?!?』

このばばあも本屋のばばあと同じ思考してやがった!!

『…すまん。若い男に興奮してもうた。それでおぬしは客かい』
『?』

ようやく本題か。

『ああ、明日まで泊めてほしいんだ。部屋はあるか?』

『もちろんあるとも。一泊なら6000ルギーじゃよ。』

…ルギー? 聞いたことない単位だ。

やばい、異世界って言うことを考えてなかった。

焦りながら俺は財布を見る。当然のように見慣れた諭吉さんが顔を
出す。

ゆきちさああああ〜〜〜ん!!!

今までは諭吉さんいてほしかったよ…でもいまは諭吉さんじゃない
ほうがよかった…。

ねえ、ルギーって…なんですか…??

どうしよう、どうしようどぶつぶつ呟いていたらおばちゃん

『お金…ないのかい?』

と訊ねてきた。

その目には暖かさ…冷やかさが一緒にうつっていました…。

異世界での…同情。

『うん…実は…ね』

正直に答えた。すると、

『しょうがないねえ…つけといちやるから明日から稼ぐんじやよ?
この町はハンターとか稼ぎ口がたくさんあるんじやて』

『ありがとうおばちゃん!…!』

今は女神にも見える不気味な顔。

まあ、直視しなければ俺にとっての女神だ!!

直視しなければ

そんな失礼なことを考えていると

『じゃから今夜はゆっくり休んで、明日から頑張るんじゃないよ』

『おう!あ、それと。お願いついでにもうひとつ。ハンターってどんな仕事なんだ?』

『そんなことも知らんのかい!? ハンターってのはね? この世界にいる魔物を倒す仕事じゃよ。昔は魔王が率いていたが、今は魔王がいるかさえもわからんのお』

そんな仕事があったのか。知らなかった。

『この町は有名なハンターを多く他の町に出してるからハンターの仕事が多いんじゃないよ。最近なら雪菜やヒメが有名かのお』

雪菜!?

あいつそんなに有名なハンターだったんだなあ…。

今度戦い方とか、いろいろ教えてもらおうかなあ

『ありがと、おばちゃん。明日から頑張るよ。おやすみ』

そういつて部屋に入った。

というか、すぐに意識が飛んでいった。

異世界にきてしまった…そんなことを考えていたのは部屋に入った一瞬で

布団を見た瞬間から、寝ることに意識が移ってしまった。

だから、俺はすぐに寝れる準備をして、布団に入った。

そして、まさに今、意識が手放された。

二話 〱再会〱 (後書き)

編集が大変です

三話 能力開花?! いや、目覚めて?マジで!頼むから(汗)(前書き)

今日が祝日ということを考えていなかった作者ですWW
今日も二話ほど更新しようと思います。

三話 能力開花?! いや、目覚めて?マジで!頼むから(汗

俺は夢を見た。

夢の中で黒い猫に青色のツバサのついたものを見た。

そのまるでスフィンクスのようだが、顔は可愛い猫だった。

『ふふふ、驚いておるようだの。我は主をこの地に招いた……
いくなれば精霊だ。』

驚いている俺を考えず、精霊は話を続けた。

『約束通り、主にこの世界で生きる術をやるう。いや、能力と言っ
た方が正しいか。』

『約束だと？俺はお前と何か約束を交わしたか？』

俺は訊ねた。

俺がそういつと

『ふ、主は忘れていたか。だが、能力がなければこの世界では生きていけぬぞ？みな、何かしろの能力をもっているのだから。』

笑いながら自称精霊は言った。

『具体例をあげるなら、雪菜と言ったか、あやつは空気中の冷気を操ることができる。そして、こここの婆は・・・ふむ、特殊だな。能力の強さ、能力名を視ることができる。』

『そんな能力を俺にもくれるっていうのか？』

『ああ、主は戦闘に特化した能力か。商業に適した能力。どちらが欲しい？といっても心は決まっておるようだが』

そういつて精霊がいやらしく笑う。

お見通し、か。

『おう、決まってる。俺は戦闘に向いている能力が欲しい。』

『戦闘向き、だな。では、どういった能力が欲しい？』

『お前が与えてくれるんじゃないのか？』

与えてくれるなら選択はあまりできないんじゃないか？と
思っていた。

『それはそうなのだが。我は主のイメージを能力として
主に植え付け、力を授けるのだ。』

そういうことか。

早速俺はさっきから浮かんでいたイメージを思い浮かべる。

少し反則的だが。

『ふむ、主も見かけによらず、なかなか悪いやつだ。』

精霊がそういうと、俺の目の前に煌びやかな日本刀が現れる。

しかし、普通の刀と少し違うのは柄に5つの窪みがあることだ。

刃の部分には綺麗に波が入っていた。

『主の能力は、刀に能力を5つコピーし、それを扱う能力だ。影写かげうつしとでも名づけるか。』

影写……ね。カッコいいじゃん。

『でも、俺はコピーできる数をイメージしたとき指定してないぞ？』
そう、数は指定していなかった。

『さすがに数を指定しないとこの世界を主が支配しかねないからな。』

コピーは刀をコピーしたい能力の持ち主に握らせることでコピーできる。コピーした能力を消したい場合はコピーした能力名をつけ、空に掲げればよい。』

さすがに発動するまでに条件が加わるのか。

『まあそれくらいならいいか。』

『それと、刀は主が名づけ、その名を口にすれば現れるだろう』

刀の名前か。楽しみだ。

『では、我は消えるとするか。そうだ、最後にひとつ。我の名はソフィーだ。覚えておくといい。』

柔らかなその言葉が聞こえたところで

俺は目が覚めた。

『ふぁーーあ
』

おおきくあくびをして、今見ていた夢を思い出した。

『まあ、なによりも刀の名前を考えるか。能力名が影写、か。』

んー、影写。影を写す。．．．あれだ。

『影斬丸』

そうつぶやくと、俺の手には柄が真っ黒な刀が現れた。

夢は本当だったか。

影斬丸を振るうと

「ひゅん」

と音がした。

そして、振るった先にあったカーテンは横に斬れた。

切れ味はよさそうだ。。。

そういえばこの町にはハンターに仕事を出してらって言ってたな。

とりあえず、ハンターになって仕事を請けるか。

いや、まずはおばちゃんからいろいろ聞いてからだな。

三話 能力開花?! いや、目覚めて?マジで!頼むから(汗)(後書き)

なんか少しずつ、自分の下手さが現れてきましたww

ご意見、ご感想お待ちしております。

四話 人生の先輩とそれからとこれから。(前書き)

今日は10時、11時くらいにもう一話くらい更新したいと考えています。

できなかつたときは申し訳ないです。

それと、話のストックを作りたいと思っっているのですが、保存の仕方がわかりません。

もし、分かる方がいたら、教えてもらえるとありがたいです。

では、お楽しみください。

四話 人生の先輩とそれからとこれから。

『おはよー、おばちゃん！』
朝は何事も元気よく、な。

『・・・・・・・・』
返事がない。ただの屍のよ・・・いやいや。寝てるだけだな。

俺、そんなに早く起きたかなあ・・・。
時計をみる。

8時半。
年寄りはいいい加減起きる時間だ。

『おばちゃん。そろそろ起きろよ。』
そう言って体をゆすると

『誰じゃ！！』

いきなり飛び起きて声を発するおばちゃん。

『俺だよ。昨日会っただろ？』

『ああ、おぬしか。それで、朝っぱらからわしになんのよづじゃ？』

『ハンターにどうやってなるのか聞きに来たんだ。』

『昨日すすめたのはわしじゃし、それくらい教えてやるか。』

そういつておばちゃんは話し始めた。

まず、この町でハンターになるには、不定期で開かれる審査会へ行き、決められた課題をこなす。
というものだった。

『それっていつ頃開かれるんだ？』

『おそらく来月の3日じゃの。』

『そんなに待つのか!?!?』
そんなに待てない。さすがにおばちゃんもそんなにお金を貸してはくれないだろう。

『ふふふ、これには裏口のようなものがあつての。Aランクハンター以上の推薦があれば、先にクエスト紹介所で審査してもらえるのじゃ。』

『ホントか!?!? A級ハンターってのはどこにいる!?!?』

『まだわからんか。目の前におるじゃろて。』
ため息をつきながら言うおばちゃん。

目の前???

おばちゃんしかいないじゃないか。そう思って後ろも見るが人はいない。

『・・・』

『ああ・・・少しな。おばちゃん、なんでそんなことわかるんだ？』

『わしの能力はな、能力を視ることが出来る能力じゃからな、能力名は「心透」じゃ』

そういえばソフィーも昨日おばちゃんは能力を視れるって言ったな。

『そうだったのか。能力名だけなら感情まで読まれそうだな。』

苦笑混じりに俺が言つとおばちゃんは

『人の善悪くらい見分けられるがの。長年の勘で』

そう言ったので俺は笑ってしまった。

つられておばちゃんも笑う。

このおばちゃんはなにかと力になってくれそうだ。

そんなふうには話しているとおばちゃんが

『できた。我ながら会心の書じゃ。』

そういつて封筒を手渡してくる。

『これをクエスト紹介所にもって行けば日時と場所、試験内容を教えてもらえるじゃろう。』

だから、渡してくるんじゃない。そういつておばちゃんはまた布団に戻っていった。

『ありがと！！！それと、起こして悪かった。おやすみ！！』

俺はそういつて宿を後にした。

クエスト紹介所まで何回も道に迷ったが、時間はたっぷりあったので散策しながら行った。

その最中にふと

『昨日とは違う能力が視えるが・・・』
と言ったおばちゃんの手紙を思い出した。

昨日とは違う？

つまり元からなにか備わっていたのか？

だが、深く考えようと思ったとき、クエスト紹介所についてしまった。

『こんにちは。今日はどういったご用件でしょうか。』

感情の一切もっていない言葉に少し困惑したが、すぐに

『ハンターとして審査してもらいたくてやってきました。これは推薦状です。』

そういっておばちゃんにもらった推薦状を渡した。

すると奥から一人のおじさんが出てきた。

外見は一部を除いてジェントルマンをあらわしたような感じだった、唯一つ、髪の毛が寝癖だらけなこと以外。

『あ、所長』

そういつて最初に用件を聞いてきた女性が事情を説明する。

そして、その所長らしき人は推薦状を読んで笑っていた。

『ほー。お前さんが。俺はこの紹介所の所長だ。よく、あのばばあのお眼鏡に適ったもんだな』
笑いながら言われた。

手元を良く見ると

「その子を試験するんじゃよはーと」
と書いてあった。

そのあとはどんどん話が進み、審査についてはこうなった。

日時は明日の夜8時場所は訓練所の4号室。

試験内容は試験官との1対1ということになった。

そして、紹介所を出た俺は、明日の試験に備えて能力をコピーしようと思った。

まずおばちゃんの「心透」の能力をコピーさせてもらおう。と思った。

なぜなら、心透を使って扱いやすい能力をコピーしたほうがいいと
考えたからだ。

そう思い、俺は宿に向かった。

宿ではさすがにおばちゃんも起きていて、クエスト紹介所でのこと
を話した。

そして、おばちゃん的能力をコピーさせてほしいとも言った。

すると

『よいよい。刀の柄を握ればよいのじゃな?』

そう言って俺の影斬丸の柄をつかんだ。

そうすると周囲に少しの光が生まれ、刀に5つある窪みの一つに赤色の石がはまった。

『これでよいのか？』

そういっておぼちゃんの返してくれた刀を握った俺の目に

「能力を知る力、心透」とおぼちゃんの頭の上に浮かび上がった。

しばらくして消えたが。

『ありがとう。これで、使える能力を探しやすくなった。』

そういつて俺は再び町へ走っていった。

四話 人生の先輩とそれからとこれから。(後書き)

宿の話が長引いてしまった。

今夜、

町について、そして雪菜との夜の対談について更新したいと思います。

みなさん、もしよかったらご意見、ご感想お願いします。

作者、初心者ですのでww

五話 出会いと再会（前書き）

ご意見ご感想、お待ちしております。

感想がなくて、そんなにつまらないのかっ！？とあせっていますw

五話 出会いと再会

『へえ〜』

思わず声が出てしまった。

なぜなら

町を歩く人、人、人、人

みんな能力を持っているからだ。

同じ能力を何度も視ることがあるから、十人十色ってわけじゃないんだと思った。

『それにしてもいるんな能力があるよなあ……』

そんなことを呟いていると

『そうでしょ、そうでしょ 特に私のなんて珍しいよ?』

突然背後から声がした。

驚いた俺は後ろを振り向いた。

見えた少女はオレンジ色のショートカットの髪に、大きなぱっちり二重。

小さな口から八重歯が見えるがそれが可愛さを引き立てている。

そして、視えた能力は

『知ってる場所に瞬間移動する能力……か』

たしかに視たことなかった。

これは、使いやすい。

『あつたりいー！お兄さんの能力はコロばあと同じなんだね。能力がわかるなんて。心透でしょ？』

ニコニコしながら聞いてくる。同い年くらいだから敬語も使わなくていいよな。

『ん？ま・・・まあな。それと俺の名前は杏夜だ。コロばあって誰だ？』

とりあえず、俺の本当の能力は言わなくていいか。

『わたしはロコだよ。』ロコはあつて言つのは宿屋に住んでる元
凄腕のハンターさんのこと。』

ああ！！あのおばちゃんのことか！！！！

変態だと思つて・・・いや、恩人に失礼だな。

『あれがロコばあだったのか。とりあえずよろしく、ロコ。』

『「ちらりそよろしく」き夜つて呼ぶね』

ロコはそういつてから俺を値踏みするようを見た。

『き夜つてハンター？なんとなく。だけど。』

『あー、まだなってないんだ。明日、試験をしてもらってそれだ。』

俺は少し恥ずかしそうに言う。

『ロコはもうハンターなのか?』

どうしてそんなこと聞くの? 身体を鎧に包んで、腰には短刀が二本ついているからだ。

『うん っって言ってもまだ駆け出したからEランクだけど。でも、それならき夜ともすぐ一緒に仕事するかもね』

そういつてからロコは不思議そうに訊ねてきた。

『き夜? 武器とか持ってないの?』

そう聞かれて、俺はちょっとあっちを向いてるように促した。そして

『影斬丸』

そう発すると俺の手に刀が現れる。

『こっちむいていいよ。』

すぐにロコはこっちを向いて、そして俺の刀をつかみ眺めた。

その目はとてもキラキラしていた。

あれ？おかしい。だんだんと輝きがましているような・・・って！
！！

そう、輝いていたのはロコの目だけじゃなかった。影斬丸も・・・だ。

そして、刀の窪みに二つめの宝石のような石が。

今度の色は黒い色か。

『なんかすごそうな刀。なんか隠されてる感じの刀だけど。』

そういつて返してくれた。

『あ、いっけなあーい！あたし、これからマカロン狩りに出かけるんだった。それじゃーね。バイバイ』

そういつてロコは駆けていった。

その後も飽きることなく俺は能力を視続けた。

そして、日が暮れ、俺は昨日の草原に向かった。

そこにはもう雪菜がいた。

魔法の練習をしていたのか、地面には霜が張り付いていた。

風が吹き、その風にすこしの雪が運ばれていった。

雪菜の白銀の髪は風に流されていたが、その乱れる髪を手でそっと直す姿がとても美しかった。

『くんばんわ。』

俺はそう声をかけた。

『こんばんわ。今日は昨日と少し雰囲気違いますね。』

微笑みながら俺に言う。

『雪菜は魔法の練習？冷気を操っていたみたいけど。』

これは心透を使わなくてもわかることだが。

『ええ、魔物と戦うときに、少しでも役に立てるように。ね。』

『雪菜もハンターなんだな。ランクはどれくらいなんだ？』

そう訊ねると

『今はBランクね。SSランクを目指してるの。ってBランクでこんなこと言ってるのもね。』

苦笑気味だったが、目にははっきりした意志が宿っていた。

『吉夜はハンターなの？今日は手に刀を持っているみたいだけど』

『あつ。』

俺は心透を町で使えばなだったので、刀をしまい忘れたのだ。

『俺は、まだハンターじゃないんだ。明日、試験を受けて、ハンターになるうと思ってる。』

そして、今日あったできごと（ロロのことは言わなかった。）を話した。

そう。と呟いた雪菜はこちらに杖を向けた。

『それなら私が、絶対受かるように特訓してあげる。』

俺は背中に冷たい物を感じながら、どう返事をしようか考えていた。

五話 出会いと再会（後書き）

文章が下手で申し訳ないです。

一週間に一度、といましたが、一週間に2回以上の更新を目指していきたいと思います。

まだまだ下手ですが、この作品をどうぞよろしくお願いします。

六話 　　〜二人だけで真夜中特訓〜（前書き）

書くのが遅くなってしまい、申し訳ありません（汗）
今週がテストということをお忘れていた作者ですww

自分で書いた作品を読み返してみて、話の展開が下手。語彙力のなさがとても目に付きました。

自分の納得のいく話を作っていきたいので、みなさんに力を貸していただきたいです。

少しでも、気になるところ、直したほうがいいところを指摘していただきたいと思います。

ご指導、よろしく願います。

六話 二人だけで真夜中特訓

『さっぶっ〜〜』

うおっ！！

危なかったあ…。

少しでも気を抜くと雪菜の氷柱が刺さってしまっ。

俺は、いつか孫ができたとき

『綺麗な女の人と真夜中の特訓ってなにか期待すると、痛い目みちやうからね。』

そう伝えようと思った。

なぜこんなことになっているかというところ…

〈回想〉

俺は、明日、ハンター試験を受けることを雪菜に教えた。

『それなら私が、絶対受かるように特訓してあげる。』

『ホントか！？俺、能力をうまく使えないから助かる。』

それはよかったわ、と雪菜は微笑みながら言った。

そう、ここまでは良かったんだ。

じゃあ始めましょうか。雪菜が杖を軽く振った。

周りの草に霜がつき始める。

驚き、一歩後退すると、転びそうになる。そこには氷が張られてい

た。

『ちよ　！　もう　！？』

雪菜は返事を返さず、杖を振る。

雪菜の頭の上に徐々に氷のつぶてができ始めていた。

俺は影斬丸を出すと、窪みにはまっている赤色の石に触れた。

『じゃあ、俺も行くぞ！！』

そう宣言し、雪菜の後ろへ能力を発動し瞬間移動した。

もらった！！

そう思い影斬丸を峰で首目掛けて振りぬく。

よし、あたった！！

その瞬間雪菜の首が飛び、氷のように崩れた。

正しくは、氷で作られた雪菜の像が音を立てて崩れた。

崩れたことであたりは白い冷気に覆われる。

そこへ雪菜の氷のつぶてがき夜目掛けて飛んでくる。

野球ボールのような氷は壱夜の右胸へ直撃する。

『壱夜さん、あまり私を甘く見ないでください。』

あきれながら、壱夜に言う。しかし、壱夜にそんなことを聞く余裕はない。

肺へ高速のつぶてが直撃したのだ。呼吸ができず、うずくまっっている。

ようやく立ち上がり、呼吸を整えようとしたが、肺が膨らむたびに痛みが走る。

いつの間にか、壱夜の周りをたくさんの雪菜（像）がかこっていた。

どれが本体なのか…。

『さっきのアイスボール（氷球）は手加減しましたけど、次はもう少し、危険度のあるものにしましょう。真剣にやってもらったために。

』

そして、さっきのアイスボールが砕け散る音がして、足元に氷柱が3本突き刺さった。

（回想終わり）

俺はさっきから、氷柱をよけることに集中しているため、雪菜本体を見つげ出せずにいた。

選択肢としては

? 氷柱を気にせず、像を破壊しまくる。

? 俺も気配で探る。

? 諦める。

? 氷柱を避けず、影斬丸で弾き、少しずつ近づく。

くらいなもんか。

? はたぶん2個くらい壊したところで氷柱が刺さってしまっから無理だ。

? は…むこうの世界でそんな危険に巻き込まれたことないからできない。

?はない。なんでこんな選択肢にいれたんだか。

?は……………これいいじゃん、いけるじゃん！！

本体からしか氷柱飛んでこないもんな！！

弾きながら飛んできた方向に少しずつ移動していけばなんとか。

よし！！

そう思った俺はすぐに行動に移した。

氷柱が飛んでくるが、恐怖を抑えて刀で弾く。

ガンツ！！

鉄が硬いものを弾く鈍い音がした。

そっちか。

右斜め前から氷柱が飛んできていた。

次は真正面。

その次は左斜め前。

その次は左。

その次は後ろ。

わかった
！！

雪菜は反時計回りに動きながら俺に向かって氷柱を放っているんだ。

そうとわかれば…。

〈雪菜目線〉

吉夜さん、なにか考えているみたいですね。

頑張ってください。終わったら、ご飯でも作りますから。

そんなことを考えながら氷柱を放っていた。

でも、全力でないと言っても、私のアイスピア（氷柱）をあんなに避けたり防いだりできるなんて。

彼の予測と反射神経には、素直に驚いていた。

次の瞬間。目の前に傷だらけの壱夜が現れ、息を吸い込んだ。そして、私は彼の刀に吹っ飛ばされた。

〜壱夜〜

ふう〜。

氷柱のだけが見え、本人が見えないから、距離を推測で瞬間移動したため雪菜の目の前に出ちゃったけど、まあ結果オーライかな…って!!!

雪菜のことぶっ飛ばしちまった!!!いくら峰とはいえ…。

俺は急いでかけよって、雪菜を抱き起こす。

『大丈夫か！?』

雪菜は目を開けない。

『おい!!!』

『ふふっ。大丈夫ですよ。峰打ちされる瞬間、そこに氷を作りましたので。でも、ダメージは受けちゃいましたけど。』

そう言って舌をちよろっと出していた。

『どうして私の位置がわかったんですか　??ばれないように移動していたのに。』

『ああ、反時計回りに、だろ　??氷柱の軌道で気づいたんだ。それに、近づいていったら、雪菜は見えなかったけど、氷柱が空に浮いてるのが見えて、あそこだ!!!と違って瞬間移動したんだ。背後

に出ようと思つて真正面に出ちまったから、俺が先にやられるんじゃないかとヒヤヒヤしたが』

『そうだったんですか。』

そして、俺は雪菜を立ち上がらせた。

けれど、雪菜は離れようとしなない。

『もう少しこうしてもらつてもいいですか？ 結構な時間、冷気を操っていたので、身体が冷えてしまつて。』

恥ずかしさで耳が赤くなっているみたいだ。顔は俺の胸の中に隠していて見えなかった。

雪菜は俺にしがみつくように体を預けている。俺は、その体を支えてあげた。

雪菜は、暖かいです。と言つて、こちらを見上げた。

俺は、もう少し、このままで……。そんなことを考えていた。

六話 二人だけで真夜中特訓（後書き）

いま、編集してしまいました。

中途半端なところで終わってしまってすみません。

土曜日、日曜日と更新しようと思うのでよろしくお願いします。

ご意見、ご感想お待ちしております。

七話　　く氷姫の手の中で　　（前書き）

今日、明日、明後日の三日更新を頑張ってみたいと思います。

ただ、今日の話はどうしても、この終わり方がいいので、短いですが、お許してください。

七話 　　く 氷姫の手の中で く

く 雪菜 く

き夜さん、暖かい。

このまましばらく…。

あれ??さっきまで支えてくれたのにき夜さんがこっちに傾いてきた。

『すうくZZZ』

私は氷の滑り台を作ってき夜さんをゆっくり寝かせた。

き夜の寝顔は小さいときに遊び疲れて寝たような満足気な顔だった。

雪菜は杏夜の髪をそつとなでた。

『今日はお疲れ様です。』

そう言っつて私は杏夜さんを抱きしめた。

（杏夜）

なんか暖かいなあ。

柔らかななにかに包まれてるような……。

意識が少しずつ戻ってくる。

ハンター試験を受けることになって、雪菜が訓練してくれて、それで……。

はっ！！！！！

俺は飛び起きて周りをみた。

いつの間にか俺は黒と白の部屋に来ていた。窓の近くには大きなまのぬいぐるみがあった。

足の上には雪菜のすやすやと眠る姿。

そして、俺の手は

雪菜の暖かい手に包まれていた。

七話 氷姫の手の中で (後書き)

七話がこんな短くてって思うと思います。

けれど、ここで話を区切りたいと思います。

明日の八話で、ついにハンター試験です。

お楽しみに。

八話 〱試験〱 (前書き)

土曜日中について思っていたのに、12時を回ってしまいました。
すみません。

明日も…今日も頑張りましょう!!

八話　　～試験～

『起きてくださいーい。』

その声で俺は目を覚ます。

目の前には雪菜がいた。

『うわぁー!..!』

昨日のことがあるから意識してしまっ。思わず顔をそらしてしまっ
た。

『そんな勢いで驚くなんてひどいですよー。』

そんなことよりも、と言って

『吉夜さん、今日はハンター試験ですよね。頑張ってくださいね。』

『あぁ、昨日は雪菜に練習させてもらったからな。頑張ってくるよ。』

』

『はい。あ、私、今日は用事があったてそろそろ出てしまっただけ
で…。』

『あ、いいよ。じゃあ俺も出るよ。』

俺は布団から出た。

それから、少し話し、俺は雪菜の家を出た。

しかし、まだ眠い。昨日は結構遅くまで練習していたからな。

俺の足は自然と宿に向かっていた。

部屋につき、布団に入りすぐに寝てしまった。

~~~~~



クエスト紹介所をイメージし、瞬間移動！！！！

ふっ！！！！

あれ？？

ふっ！！！！

瞬間移動できない。

あ、そういえば雪菜が昼間…。

『き夜さんは能力のレベルをもっとあげるべきですよ。今のままだと短い距離で自分しか瞬間移動できないみたいですから。』

って言つてたやないか~~~~~い!!!!!!

俺は訓練所へ走る走る走る。

確か、紹介所から少しのところだった。

走る。

走る。

はしる。

ハシル。

ついたあああああ！！！！。

『なんじゃ、おまえさんギリギリじゃのう。』

宿屋のばあもといコロばあがいた。

『はあ、はあ。…間に合ったんだからいいじゃねーか。』

いまだ息が整わず、荒い呼吸を繰り返していた。

『それもそうじゃ。因みにわしは観戦者と言つか、推薦してしもうたから来なきやならなくてのお。』

そうだったのか、すまないコロばあ。

『本人も来たようですので、試験を開始してもよろしいですか。』

声のするほうをみると、黒い執事服のようなものをきた青年がいた。その手には長い槍が握られていた。

『あ、はい。お願いします。』

『それでは試験方法を伝えたいと思います。』

試験とはこういうものだった。

試験官（この青年）と模擬戦をし、実力を示すことができればいい、というものだった。

倒さずとも実力を示してくれれば、といわれた。

かっちゃん!!

あーもうやっちゃうね。やっちゃいますよ!!

『ほっほっ。おぬしの目、気合が入ったのお。』

当たり前だ、こんなこと言われたら倒してやりたいと思ってしまっ。

そんなことを考えていると

『では、そろそろ始めたいと思います。』

練習に使われているような長方形のステージに上った。

15メートル四方くらいだった。これは結構派手に動けるな、なんて考えていた。

はじめっ!!

その声と同時に俺は刀を出現させる。

まずは様子見だ。

槍を構え、少しずつ寄ってきた。

まだ俺と槍とは3メートルほど離れているのに槍をこちらに突いた。

こいつ、間合いもわかってないのか？？

そう思った、しかし

なにっ！？

槍の先から白い、風のようなものが飛んできた。

影斬丸で防ごうとしたが、左肩にあたってしまった。

ドスンっ。

鈍く、殴られたような音がした。いや、実際なにかで殴られたようだった。

でも、なにで？？

…そうか、衝撃波か！

槍の先から衝撃波を飛ばしていたのか。

最初に、心透で能力を確認しておけばよかった。

肩を抑えている俺に向かって追撃をかけてくる。

瞬間移動するか？ いや、向こうは俺の能力を知らないんだ。

勝負どころで消えて意識を刈り取れば…。

それまで、攻撃をよけるんだ。

何度も槍と刀のぶつかり合う音が響く。

しかし、いつまでたってもチャンスは来ない。

向こうは疲れる気配もない。このままだと俺が疲れちまう。

しょうがない。

俺は青年の後ろをイメージし、消える。

そして、がら空きの背中を峰で切る。いや、殴るといった方が正確かもしれない。

『かはっ！！』

青年はステージから弾き出され気絶した。

…あれ??

いくら瞬間移動したからって、一撃って…。

警戒してた俺がバカみたいじゃん。

『おぬしは警戒しすぎじゃよ。試験にそんな強い試験官を使つはずないじゃろつて。ハンターおめでとつ。』

本来ならハンターになった！！…って喜ぶべきなんだろうけど…なんだろつ。

この、空虚感。

あー、まあ、これで俺もハンターだな。

はあ…。

~~~~~

『そんなにため息をつかんでもええじゃろつに。』

いや、だって!!だってね!?

あんな弱いのに、倒せなくても実力を示せばって言うんだよ!?

そんなこと言われたら強いと思っちゃっジャン!!

それが一撃だよ!?!?!

冷めるわあ…。

『合格したのに、たくさんため息をつくからカウンターの人も困惑しとったぞ。』

はあ…。

『でも、これで明日から俺もハンターとして仕事ができる!?!』

『ま、Eランクじゃから、仕事なんて子供の手伝いに少し毛の生えた程度じゃけどな。』

その言葉でさらに沈みこんだ俺は返事も返さず、無言で宿に入り、寝た。

八話 〱試験〱 (後書き)

戦闘シーンが下手です。

どうにかならないものか…。

そして、もっと話を進めるはずが、あまり進みませんでした。

明日はもっと頑張ります。

辛口でもいいので、どなたか、下手な部分を指摘してくれるとありがたいです。

よろしく願います。

九話 笑顔と不安と焦り (前書き)

まだ週末課題がたくさん残っているため、文章が短いかと思ひます
がお許しください。

九話 　　く笑顔と不安と焦りく

朝、目を覚まし、ようやくハンター試験に合格した喜びを感じた。

まあ、試験内容はあれだったけど。

『おお、おぬし起きたのか。時間があるときにライセンスを取りに行くのじゃぞ。』

『ライセンス??』

『昨日ハンター試験に合格したじゃろうが。ハンターはライセンスを紹介所に提示せんとクエストが受けられんのじゃ。』

そうだったのか。それなら早いところ取りに行つて簡単なクエストでもやってみるか。

そう思い、俺は宿を出て、紹介所へ向かった。

~~~~~

まだ朝も早いのにこの町はもう働いているのか。

少し驚いた。なんせまだ7時台なのにたくさんの人が物を買ったり売ったり、話したりしているのだから。

俺は口から眠気が漏れ出さないよう押さえ込み、眠い目をこすりながらさらに歩いた。

しばらく歩くと紹介所のカウンターが見えてきた。

ただ、そのカウンターの人と話するためか、一人の女の子がオレンジの髪と一緒に飛び跳ねていた。

『あ~~~~!!!!お兄ちゃんだ!!!!』

そう言って少女がこっちを指差す。

俺は、誰のことだろう? と後ろを振り向くがそこには誰もいない。

『もう!!!! なんてとぼけるのさ!!!!私のこと忘れちゃったの??』

『いや、ロコのことでは覚えてるよ?? でも、なんで俺のことをお兄ちゃんって呼ぶんだよ?』

俺は当然の疑問をぶつけた。

するとロコは首を小さく傾げて、人差し指を口に当てる。

『お兄ちゃんいなくて憧れてたから』

当然のように言ってくる。でも、憧れてたって言ったときにロコの目が少し寂しそうに見えた。

『それに、昔夜は見た目はOKだし、優しそうだから お兄ちゃんにけっして』

嬉しそうに腕に抱きついてくる。

『俺に拒否権って言うのはないのか??』

あきらめているけど形だけでも…と思った。

『ないよっ』

ウィンクしながら嬉しそうに言う。

でも、こんな嬉しそうにされたら断れないな。

『それじゃあ、改めてよろしくな、ロコ。』

そう言って握手しようとして手を出す。

『うん、よろしく。お兄ちゃん』

そう言って手を握ってくれた。

でも、手を離してくれない。そろそろ握手終わりじゃないか???

『ロコ、握手…少し長くないか??』

返事がない。無視された。

『おーい。ロコ??』

『どうしたの?お兄ちゃん』

『握手長くないか??』

『……………』

はい、無視です。無視されました。

『握手…まあいいや。それで、モコはどうして紹介所にいたんだ??』

『私もハンターなんだよ??クエストやろうと思ったんだけど、一人じゃできなくて。だから、フランクのハンターの人探しにきたの  
お兄ちゃんハンターになれた??』

『ああ、それでライセンスを受け取りにな。俺がライセンス受け取ったら一緒に探してやるよ。』

こいつの能力があったから試験受かったようなもんだし、これくらいはな。

『ホントに！？じゃあお願いしちゃうかなあ』

『それじゃ、ちょっと待ってるよ。』

そう言って俺は手を離れた。

『ええ〜！〜！』

ロコは口をへの字にして、不機嫌を身体全体で表している。

具体的には俺の胸をポコポコ叩いてくる。ちょっと可愛いかも。

『わたしもいく〜〜！〜！一緒にいく〜〜！〜！』

そう言ってまた手を握ってきた。

こいつは駄々っ子か。まあ、ライセンス受け取るだけだからな。

俺はちょっと口から笑みがこぼれてしまった。

『わかったよ。じゃあ一緒にな。』

そういって、俺も手を握り返した。

手を握りながらカウンターに行き、お姉さんに声をかける。

『すみません、柊 壱夜 と言うのですが、ハンターライセンスはありますか??』

『少々お待ちください。』

営業スマイルを浮かべ、お姉さんは奥へ行った。

すると、すぐにこの前のジェントルマンもとい所長が出てきた。

『壱夜くん、ですね?? 少しお話があるので一緒に来てもらっていいですか?? もしよろしければ、そちらのお嬢さんも一緒に。』

俺とロコは不思議に思いつつ、はい、と答えた。

『桔梗さん、この人たちを所長室へご案内してもらえますか??』

さっきのカウンターのお姉さんに向かって言う。桔梗って名前なんだ。

『はい、わかりました。』

ついてきてください。そう言われ、後ろに並んで歩いてく。

その途中、二人で小声で話していた。

(どづしたんだろ???)

(お兄ちゃん、なにかしたんじゃない??)

(思い当たることないって)

俺は内心あせっていた。

(わたしのとき、こんなことなかったもん。)

その言葉にさらにあせる。

焦りがピークに達しそうなところで、つきました。こちらでお待ちください。といわれた。

そして、桔梗はまた営業スマイルを浮かべてカウンターへ戻っていた。

どうして、簡単にライセンスをくれないのだろう、不安と焦りが心の中を満たしていく。

ドアがコンコン、とノックされる。

九話 　　く笑顔と不安と焦りく（後書き）

さてさて、どうなるのでしょ～w w

一つ一つの文の間を短くしました。

ご意見、ご感想、アドバイス等々お待ちしております。

十話　　く昇格く（前書き）

学業と小説執筆の大変さに気づいた今日この頃w

駅伝のシーズンに入り、家に帰る時間が遅くなってきたため、金、土、日曜日更新とさせていただきます。

十話 〱昇格〱

コンコンっ

きたっ!!

『失礼します。お待ちせしました。』

そういつて所長が入ってきた。

席の向かい側に座った。

そして、机の上に封筒が置かれた。

『あ、そんなに硬くならないでください。変なお話ではないので。』

そう言つて少し笑っていた。

その言葉と表情が俺を落ち着かせた。

『まず、試験の結果から申し上げます』

『はい、お願いしますっ！！』

『とりあえず、試験には合格です。』

まあ、落ちるとは思ってなかったよ？？うん。ホントダヨ？？…嘘  
ですっ！！不安でしたあ！！

だってコロばあは合格って言ってたけど、あのばあもうボケてん  
じゃないかって言うね。

思っじゃん！？あの年齢だよ！？寝る時間異常だよ！？

もう、ヨボヨボよ？？

ただ…。

『試験…には？？』

俺はひっかかりを感じた。

『はい、ただ試験官の話では敵の観察、状況把握、能力の使用が的確だと聞きました。』

『はあ…。』

それは褒めているのか？

『それで、特別措置として、Dランク試験も受けていただきたいのですが…。』

『えっ!?!?』

『Eランクではまだ城の草むしりや、子供とのキャッチボールばかりなのですが、Dランクではモンスター討伐などが加わります。』

『そして、杏夜さんはすでにモンスター討伐もできるのではないかとというのがハンター協会の決定です。』

えーっと…俺は周りを見回した。

となりではロコがニコニコしつつちを見ている。

目がかなりキラキラしてるんですけど…。

目の前に視線を戻す。

あれえ〜。最初は少しやさしいジェントルマンに見えていたのに、今じゃ受けるよね?? 見たいな期待を込めた視線向けてくるんですけどお。

めっちゃチワワみたいなんだけど。

ええ〜断れないやん。

〜簡単なのから徐々に慣れよう計画〜 塵も積もれば山となる

が崩れていくよorz

でも、作戦変更だ!!

NEWPLAN

「一気に駆け抜けよう」 三歩進んでも一歩も戻りません

で行くぜ!!

そんな俺の葛藤が向こうにも伝わったのか、所長は

ふむふむと神妙な顔をしてうなずいていた。

ロコはいまだにニコニコだ。

「その話、お受けします。具体的にはどうすればいいんですか？」

「お兄ちゃん、それは私が教えるよ」

発展途上国の胸を張って、いまにもエッヘンとか言いそうな顔で言  
つて来た。

「え、いいよ。所長さんに聞くから。」

なんか知ってますよ〜みたいな雰囲気がかついた。

『ええ……………。うん…。』

そう言ってロコは部屋の隅で「ひ」の字をなぞり始めた。

『それで、どんな内容なんですか?？』

『では、EからD、DからC、CからBまでは説明しておきましょう。』

あ、ロコの書いてる字が「ど」に変わった。

『EからDへは、Eランクの二人一組で臨んでいただきます。内容は魔物の討伐ですが、討伐対象は毎回変わります。』

『DからCへは大体がDランク四人組のパーティでのクエストです。こちらは捕獲、討伐、情報収集の三つから二つとされています。』

『CからBへは、ドラゴンの捕獲とされています。』

…。いま最後に聞き捨てならないワードが聞こえた気がした。

『CからBへはなにの捕獲ですか??』

うん、聞き間違いだよ。だって、そんな怖いのはいるはずないもの。

『ドラゴンです。』

はい、きましたー。ここはどこぞの中学生の頭の中ですか!?

ドラゴン出現させるとかどんだけ飢えてるんですか!?

俺が困惑していると所長は

『まあドラゴン捕獲になるころには使い…。』

最後の方が尻すぼみになっていったが俺にはそんなことよりドラゴンというワードが心から離れない。

ロコは「い」の字を書き始めていたがそんなの気にならない。

シュミレーションしてみよう。

まあ中国系のドラゴン怖いから西洋のドラゴンとしよう。

イメージでも怖いから5メートルくらいの子供のドラゴン。

俺は刀を出して瞬間移動。

あれ、ドラゴン振り向いた。

あ、火の玉きた。刀で弾く。

あ、もう目の前に爪が。

ザシュ。

テレットテレットテ

頭の中に赤い帽子のひげ野郎が倒れたときの音が響いた。

その後十回くらいシミュレーションしたがどれもやられてしまった。

『とりあえず、受けてもらいます。相方はそちらの方でお探しください。』

いつまでも俺が現実世界に帰ってこないので所長はあきれ出て行ってしまった。

『はあ。帰るぞロコ。』

俺はロコと一緒にそこから出た。

ロコは

『これで私も。。。』

とつぶやいている。

これからどうしようかなあ。

十話 〱昇格〱（後書き）

10000アクセス突破してましたww  
嬉しかったです。

感想、評価お待ちしております。

十一話 く仲間を求めてく(前書き)

伏線が下手ですorz

それと、一話毎のボリュームをもっと増やした方がいいでしょうか。  
意見が聞きたいです。

十一話　く仲間を求めてく

ロコに聞いた話だと、俺がぼーっとしてる間に討伐対象、日にちは手紙が送られてくるらしい。

んーまあまずは仲間探しだよなあ。

『なあ、ロコ??どこに行けば仲間を集められると思っ??』

ロコは驚いた顔でこっちを見た。

『あう…多分紹介所にはいるんじゃないかな。』

なにか言いたそうな顔をしている。

『どづしたんだ?ロコ?』

『え…／＼お兄ちゃん…私のハンターランク知ってる??』

『Eランクだろ??』

『お兄ちゃんがいま探してるのは??.』

あ…。

『じめんっ!…!…!ロロのこと忘れてた!…!そうだな。ロロと受け  
ればいいんだ。』

『いいもん。ロロはどっせ影薄いもん。』

また拗ねちゃった。

ふわっ。

『ふえ!?!?!?!?!』

『しめんな。』

俺は後ろからロコを抱きしめてる。

身体が一瞬ビクツとしたけど抵抗しないからいいよな。

『悪いと思ってるなら…もう少しづつして？』

『ん？わかった。』

昔夜はただ、これ以上小さい子に拗ねられるのもと思っての行動。

ただ、ロコに新たな感情が芽生させてしまつたには十分だった。

~~~~~

宿につき、ロコばあに報告。

す
ち
る
こ

『知っておったよ?? 推薦したのは誰だと思つてるんじゃない。』

『……………。はい。ごめんなさい。』

今日はこんなことばかりだあー。

俺は布団に入る。

今日は精神的に疲れちゃった。

意識を手放しかけたとき頭の中で

『試験はどうでした?』

声が聞こえた。

あっ……………!!

雪菜に報告してなかった。

やっべええええええええええ！！！！！！

いや、やばいよ！？雪菜起こっちゃっよ！？

怒ったら俺氷漬けにされちゃっよ！？

アイスワールド展開されちゃっよ！？

逃げ俺。

走るんだ俺。

メロスより速く。

メロスは友情のためだったけど、俺は命のためだから。

デッドorライブだから

メロスより走っちゃうよ!?

そんなことを考えて俺は雪菜の家へ向かった。

~~~~~

『遅いです。試験が終わった日にきてくれると思ったのに。』

雪菜は拗ねている。

こんな光景さつきも見たな…。

デジャブ???

それなら…。

ふわっ

俺はまた抱きしめた。

『えっ／＼／＼／＼』

『どうしたんですか！？ 恥ずかしいですよ…』

雪菜は恥ずかしそうに顔を下に向けている。

『あ、ごめん。』

そういつて俺は離れた。

『あ…。もう…。』

小さな声で雪菜がつぶやいていた。

『あ、そつだ。私、コロばあから聞きました。壱夜さんの能力』

『もし良かったら私の能力も使ってください、壱夜さんの……力に  
なりたいです。』

『ありがとう。じゃあ俺の刀を握ってくれるかな』

そういつて影斬丸を差し出した。

すると周囲に光が現れ始めた。

窪みに三つ目の石がはまった。今度の石は青色だ。

『では、今日はゆっくり休んで、明日からまた特訓ですね！！私が  
Bランクくらいの力をつけてあげます！！』

そういつて今度は俺の手を握ってきた。

『お願いします。』

そういつて俺は再び特訓の毎日へ突入した。

十一話 仲間を求めて〜（後書き）

今日はまた夜に更新します。

楽しみにしててくださいw w

あ、それとお時間があつたら、作品の評価もしていただきたいなあ  
…なんてw

だって！あんまり評価がないんだもん！！さびしいやんw w

十二話 氷に舞う姫（前書き）

頑張ります。

少しずつ、一話の字数が減ってきてしまっているので、明日の作品は長い頑張ります

十二話 氷に舞う姫

昨日はまるで、天国だった。

俺の疲労を抜くためと、雪菜の手作り料理を食べ、ソファーに座っている

『き夜さん、肩、揉みましようか？』

と言って、揉んでくれた。

その後もあれしてこれして…。

うん、ちょっと脳内で自主規制かけました。

そして朝、雪菜に起こされおいしい朝ごはんを食べ、いつもの草原へ。



はい、きましたぁー！ー！ー！。

やはり、昨日の天国の後には地獄が来ますよねえ。

毎度おなじみ、アイシクル氷柱攻撃

俺は瞬間移動を使いよける。

ズドンっ！！

俺のさっきまでいた場所に五メートルほどの穴ができる。

刺さった瞬間にすぐ雪菜の上には氷柱ができる。

雪菜曰く、速く、強い敵との戦いを想定したものらしい。

ちなみに、想定されているのはBランク以上のモンスター……雪菜  
…俺、まだEランク…。

でも、俺もバカじゃない。

雪菜の攻撃にもパターンができてきた。

小さな氷柱を六本。それをよけた瞬間に大きな氷柱が来る。

でも、小さい氷柱から大きな氷柱に移行する瞬間、1秒くらいの間  
ができる。

そこを攻めたら…。

どうやって攻めよう……。

瞬間移動はすぐに気づく。

とすると……。雪菜にもらった能力を使うしかないか。

でも、普通の使い方じゃ雪菜にバレちゃうしなあ…。

あ、そつだ!!

俺は雪を降らせ始める。

スノーワールドとでも名付けよう。

俺は雪を降らせつつよける。

一発目、影斬丸で弾く。

二発目、ダメだ。まだできてこない。これじゃ意味がない。

俺はさらに小さな氷柱をいくつも雪菜に飛ばす。

雪はもうやんでいる。

雪菜はそれを弾く。

少しずつ、雪と氷が溶け、雪菜の足元には水たまりができ始める。

四発目、俺は瞬間移動し避ける。

移動した方向に雪菜は杖を構えている。

五発目と六発目のコンビネーションが襲いかかる。

俺は避けられないと判断し、目の前に雪の壁を作り出す。

足の止まった俺に雪菜は大きな氷柱を刺そうと狙う。

いまだっ!!!

俺は雪菜の背後へ瞬間移動する。

雪菜もこちらへ杖を向けようと……した。

『俺の勝ち、だよな??』

雪菜の首元に刀を当てる。

『……はい。こんな形で動きを封じられるなんて』

言いながら悔しそうに目を足に向ける。

俺は雪菜の足元に水溜まりを作り、一気に凍らせ張り付けたのだ。

気づかれないようにゆっくりと。

なかなかいい使い方だと思う。

雪菜はため息をつき

『では、私の家へ向かいますよ。』

そう言いつと歩いていった。

俺もついてく。

く雪菜く

まさか、あんなやり方で私がやられるなんて…。

吉夜さん、能力のレベルが少しずつ上がってきているわ。

明日から私の氷の指揮者の能力もあげてもらえば……。

アイスコンダクター

ふふっ。吉夜さんとともに上がっていくのも悪くないかもしれないませ  
ん。

そんなことを考えながら家への道を歩いていた。

~~~~~

雪菜の家につき、雪菜は能力の制御方法を教えてくれた。

自分でできるトレーニングは毎日百個、雷をつくり、それを遠くへ飛ばすというもの。

それを少しずつおおきく、たくさんにすることで能力をもっと強くできる、といわれた。

そして、雪菜との特訓を終え、宿へ帰った。

宿には手紙が届いていた。

四日後、ラベルの森で魔犬ラッシュの十匹討伐という依頼だった。

四日後だけだが、その間に俺は力をつける。

少しでもいまの能力を鍛え、強くなる。

手紙から顔を上げ、鏡を見る。最近は無意識に心透ができるようになってきたなあ……。

ん？これは……。

十二話 氷に舞う姫 (後書き)

一回書いたのに消えてしまっただけでなきたくなかった。

みんな、オラに元気を分けてくれっ!! W W

十三話 く鮮血の中でく(前書き)

タイトルはあれだけど、大丈夫ですよww

それと、本当なら十二時にできていたのに、消えてしまっ
て書き直しました。

なきたくなつたよorz

十三話 　く鮮血の中でく

今日はロコとDランク試験を受ける日だ。

昨日の夜は不安でなかなか寝れなかった。

ぶつちやけ初めての魔物討伐は怖い。

だが『魔犬アッシュ』はこのへんの魔物の中では一番弱いらしいので命に危険はないという。

『ロコ、緊張するなよ』

『うん　でも、お兄ちゃんと一緒なら…』

そんなアホなこと言ってんな。

俺は死ぬのはやだよ!?

まだ、やりたいことたくさんあるもの!!

そんなことを考えていると俺たちの前に馬車が止まった。

ただ、一つ違うのは馬車を引っ張っている馬の頭に角があることくらいだろう。

俺たちは馬車に乗って森に置いていかれた。

魔犬を討伐した証明として尻尾を持っていけばいいらしい。

今日は、いろいろと試したいこともあるし、楽しみだ。

『この森、全然光が差してこないな』

『ラベルの森は木と木が絡み付くように成長するから光がこないんだよ』

そうだったのか。

たしかに、よく見ると木に締め付けられているようなあとがある。

なんか螺旋状になってるなあ……。

俺は、周りを見回し、敵の気配を探りながらゆっくり奥へと進んでいく。

紙に書かれた情報では、ボスが一頭、それを取り巻くやつが三頭いるらしい。

そいつらは一番最近では北側で見つけられたらしい。

俺はいま東側だから、ここから北へ移動していけばどこかでぶつかるはずだ。

そんなことを考えていると

『いたっ！！ 誰だよ、こんなとこに穴作ったの』

俺は一メートルほどの穴につまづいてしまった。

『それ、ボスアッシュの足跡だよ』

『こんなにでかいのか!?!』

たしかに、その穴の周りには小さな足跡もある。

すると

ワオオオオオオオンっ!!!

遠吠えのような音が近くから聞こえた。

『お兄ちゃん、これアッシュの鳴き声だよ!!! いっっ!!!』

ロコはそういつと走り出す。

俺もその後ろを追いかける。

少し走ると開けたところがあり、そこには黒い狼のようなやつが三頭、その奥に全長五メートルほどの狼が。

牙はするどく、目は真っ赤。目が三つついていて非常に怖い。

ガールルルっ

ボス以外は俺たちを囲みはじめる。

ロコは、もう短剣を二本出し、両手に構えて待っている。

俺も影斬丸を出し、敵に攻撃される前に攻撃を始める。

『アイシクル!!』

俺はそういつて鋭い氷柱を作り出す。

その二本を目の前の一頭目掛けて放つ。

攻撃に気づき、当たらない位置へ飛んだアツシユ。

だが、俺の氷柱は軌道を変え、ノドと眉間に突き刺さる。

空中で突如軌道を変えたので、アッシュは避けきれず食らってしまった。

そして、ロコに

『俺がサポートするからロコはあいつ目掛けて走り出せ、一対一なら倒せるだろ?』

ロコは目でうなずき、走り出す。

俺は氷壁をアッシュの後ろと左右につくり、強制的に一対一を作り出す。

その間に俺はアイスワールド雪原世界を作り始める。

ロコは、左右にフェイントをいれ、短剣を投げる。

アッシュは剣を寸前で避ける。

すると、避けられた剣の位置にロコが瞬間移動し、剣を掴み斬りつ

ける。

避けたばかりで反応できず斬られる。

また瞬間移動、そして斬る。

アッシュはなすすべもなく斬られ続け、ついに倒れた。

あたりに雪が積もったところ、俺は雪原世界を解除する。

雪が解け始め、水溜りができ始めた。

俺はアッシュの足元を凍らせ、ボスに向かって走り出す。

アッシュの横を通り過ぎるとき、首を影斬丸で斬り、倒す。

そして、ボスアッシュの足も凍らせようとしたが、俺の力が足りないのか、凍らせてもすぐに動き始めてしまう。

ボスアッシュが俺目掛けて爪を振るう。

俺はギリギリ影斬丸で防ぐが一発が重い。

体重をかけて俺のことを押し倒そうとしている。

ならば、と刀で防ぎながら足を凍らせて貼り付けるのではなく、地面を凍らせ、滑らせた。

ボスアツシユは体重をこちらへかけていたので転んでしまった。

グガアアアア！！

なさけない叫び声をあげて倒れているやつに向けて

『チエックメイトだ』

そういつて首を斬った。

~~~~~  
~~~~~

『お兄ちゃんすごいよー！ ほとんど一人で倒しちゃったじゃん』

敵がいなくなったので、いつもの柔らかな表情をしているロコ。

『ありがとな』

そういつて頭をなでてあげる。

すると猫のように可愛くこちらを見ていた。

『あ、そつだ 最初の質問、教えて』

ああ、約束だからな。

そういつて俺は説明を始める。

『俺、実は能力を二つ持っていたみたいでさ、一つは影写、もう一つは能力を付加する力。んー影遊なんてどうだ??』

そう、一つ目の力はこの世界に来たときに精霊からもらった力だが、もう一つ、この世界に来たことで生まれる俺自身の力のようだ。

たとえば、氷柱をつくる。そのときに命中を付加すれば、当たる。だが、これも能力を強くしないと絶対命中ではないから避けられてしまう。

他にも、氷柱を拡散、とか 爆発とか付加することもできて、とても使い勝手がよさそうだ。

『すごいね!! 一人一つ、って言うのが常識なのに』

そういつて嬉しそうにしている。

『じゃあ説明も終わったし、そろそろ尻尾を回収しよう』

そういつて俺は尻尾を斬り始める。

ロコもきり始めた。

そして、収納袋にいれ、馬車まで戻り、俺たちは町へと帰った。

十三話 　く鮮血の中でく（後書き）

PV二万アクセス突破です!!!!!!

ホントに嬉しいです。

評価と感想お待ちしています!!

戦闘シーンをこれからたくさん書いていくつもりなので、アドバイ
スなどもいただきたいと思います。

十四話 〱尻尾と価値〱（前書き）

平日にあまり更新できない分、休日に頑張りたいと思いますb

感想、評価はいつもお待ちしております。

時間なんて気にしないでバンバン評価くださいww

十四話 尻尾と価値

俺たちは町へつくとすぐに紹介所へ向かった。

そこには受付嬢がいて

『今日はどういったご用件でしょうか』

と訊ねてきた。

『アツシユの討伐依頼を完了してきました。証拠品を見ていただきたい』

そう言って俺は収納袋を渡した。

すると、慣れた手つきで袋を受け取り、中身を確認すると

『アツシユの尻尾四本、ボスアツシユの尻尾一本でよろしいですね？』

『はい、それでお願ひします』

俺は、依頼をこなした達成感と喜び、わずかな緊張で顔が上気していた。

『では、依頼書の確認をさせてください』

俺はポケットにずっと突っ込んでいた紙を手渡した。

『昇格試験も兼ねての依頼でしたか、少々お待ちください』

そついうと受付嬢の人は収納袋と共に奥へ入って行った。

するとすぐに所長さんが現れた。

『もう依頼を達成しましたか。お疲れ様です』

にこやかにそついうと

『では、ライセンスを書き換えるのでこちらに貸してください』

俺とロコはライセンスを渡した。

所長はそれを受け取ると機械を使い、なにか作業を始める。

すぐにこちらへ戻ってきて

『では、こちらが新しいライセンスです』

今までの灰色から、黒色に変わり、青色の縁が加わった。

なによりも今までEと書かれていたライセンスにDと書き加えられていた。

俺とロコが嬉しそうに笑いあっていると

『それと、Dランクから身体の一部にマークを刻むことが義務化されています』

所長はそんなことを言った。

俺とロコはお互いを見つめおどろいていた。

さっきまでの喜びが一瞬にして忘れられ、戸惑いが生まれた。

すると所長が気づいたのか

『あ、大丈夫ですよ、痛みはないですから。まあ、私以外の人が刻むと痛みがありますが』

そんなことを苦笑して言っている所長がいたが、笑えない。

『二の腕と太もものどちらかに刻むことになりましたが………どうしますか??』

俺とロコは悩み、そして

『太も』
『二の腕』

と言った。

ちなみに前者がロコで後者が俺だ。

『では、き夜さんからいきますか』

すると所長は置くから鉄の棒を持ってきた。

『私の力でこれだけを熱して焼き付けます。私が熱を制御するのでみなさんに痛みはないですよ』

だから、私以外がやると焼ける痛みを味わってしまいます、その言葉でホントにこの町でよかったと実感した。

俺は上半身の服を脱いで裸になると、腕をだした。

そのとき、ロコがきやつとか言っていたけど気にならない。

そして、所長さんが鉄の棒を俺の二の腕に押し付ける。

じゅづづづづづづづづづづ。

焼ける音がしているが俺の腕は少しも熱くない。

むしろ、鉄の冷たさを感じるくらいだ。

一分くらい我慢していると腕にマークがついた。

トライバルデザインでカッコいいと思った。

『ランクが上がるにつれて、装飾が増えていきますから、頑張ってください』

そんなことを言われた。

次に、ロコにマークをつける。

こっち、見ないでくださいね！？ とか言っているけどいつもホットパンツを履いているので脱ぐ必要がなかった。

じゅじゅじゅじゅじゅじゅ。

またさっきの音が聞こえ始めた。

そしてしばらくして笑顔のロゴが戻ってきた。

『では、私はこれで。報酬金と素材金はカウンターで受け取ってください』

そういつて所長は戻っていった。

俺たちはカウンターへ行ってお金を受け取る

『報酬金と素材金を合わせて10フォンと5000ルギーです』

俺はお金を受け取ると、ロゴのところへ戻っていった。

『うわああああ そんなにもらったんですね!! やっぱり昔夜さんがボスマで倒してくれたからですね』

ニコニコしながら腕にしがみついていた。

『なあ、ロコ??? ルギーってどれくらいの価値なんだ???』

俺はこの世界の通貨についてよくわからないので聞いてみた。

『500ルギーくらいあれば一食くらい買えるよ。ちなみに1フオンは10000ルギーと同価値だよん』

ロコは嬉しそうにしている。

1ルギー=1円と考えたらいいのかな。

ってことは!?!?!?!?

『じゃあ今回の報酬は相当な価値なんだな!?!』

俺たちはまだ昼間だったが近くの酒場で打ち上げをした。

もちろん、ジュースとから揚げだったけど。

十四話 〱尻尾と価値〱（後書き）

実は土曜日の模試をサボった作者ですww

日曜日になって『どうしてこなかったの？』

というメールで模試だったことを思い出したという後日談。

文字数足りなくてすみません。シフトとescを間違っ
て押してしまったり文章が全部消えるというハプ
ニングがまたしても起きてしまい、やる気が
なくなり後半考えていた内容を書き続けられ
なくなりましたww

十五話 命を託す物 (前書き)

題名に負けてしまう内容…w w

さて、作者はここにきて、駅伝シーズンの到来です。

もっともっと更新したいと思っではいるのですが、いかんせん時間がありません。

帰宅が10時を過ぎてしまうので、なかなかorz

今回は学校で少しずつ書き溜めたため、量が多めとなっているので許してください。

十五話 命を託す物

んー……………zzz

昨日はどうしたんだっけ？

お昼にロコと打ち上げして…。

そうだ、そのあと雪菜の家に俺とロコで行ったんだ。

うん、最初俺を見たとき笑顔だった雪菜の顔がロコを見た瞬間歪んで、ロコの顔も歪んだんだ。

それで、雪菜がお酒を持ってきてハンターのお祝いにはお酒じゃないと言って言うて。

そのときにロコがもう満腹ううう　とか言っただけで帰って。

送ろうと思ったなら速攻瞬間移動で帰って。

俺と雪菜の二人でお酒を飲んで…どうなったんだろ。

ふにゆ

なんだろ、このマシユマロみたいな柔らかかなものは

ふにゆふにゆ

張りがあつて、でも禁断の柔らかさのような気が…。

ふにゅ

ひゃっ

ん？なんだ今の声。

『吉夜さん！！なんで私のむ／＼／＼むねをさわってるんですか！
？／／／／』

し、しまったああああああ！！

俺はゆ、ゆゆゆゆゆきなむねを揉んでいたのかああああ！！
『そういうことをするにしても、順序つてもものがあるのに…／／／
／／』

雪菜は顔を赤らめ、むねを布団で隠してる。

布団で???

『俺、昨日雪菜と一緒に寝たの!?!?』

『吉夜さんが気持ちよさそうに寝たので私も一緒にと思ってたついでに…／／／』

もじもじとする雪菜。可愛くて押し倒したくな…いや、ダメだ。

『まあ…先に寝ちゃった俺が悪いし。いいか。』

『えっ、き夜さんがいいなら…その…いいですけど。』

まあ、あれだ。

記憶がないからな。

その後は雪菜に話しかけても

『あつ……つうう／＼／／』

とかしか言ってくれなくなったからな。

『とりあえず、今日はクエスト行ってくるよ』

そういつて俺は一人で紹介所に向かった。

窓辺で悶えている雪菜を置いて……。

~~~~~

『本日はどういったご用件でしょう』

いつもの受付嬢が現れた。

たしか、桔梗：だったかな？

今日もいつものように営業スマイル全開じゃないかコノヤロー

そんなことを目で表わしていると、ふつと言った感じに鼻で笑われた。

見ました！？奥さん見ました！？これ、全国ネットに流したら問題になるんだからっ！！！！

心までは読めなかったようだな…ふつ、桔梗もそこまでのやつか…という気持ちを込めて俺も鼻で笑ってやった。

すると

ため息をついて

『なんか用かよ駆け出し野郎が』

そんな言葉を吐き捨てやがった。

そんなこといとなあああ！！！！！！

駆け出し野郎だと！？

駆け出しだけどなあ！？

俺だって頑張ってるよ！？少しずるい能力だけでも！！

雪菜にだって殺されかけたし。

あ、でも柔らかかったなあ…いかにいかに。

でも！！ お前にそんなこと言われたくねえんだよ！！

俺だつて言つちゃうよ！？ 女の人だからって傷つけちゃいますよ！？

国王ですら今の俺の言葉には耐えられないぜ！！

そんなシンキングタイムに入っていると

『言い返せないなんて、終わってますね』

はいきたああああああ

言い返してやるぜ！！ 食らえ！！

『あ…すみませんでした』

俺のへたれ！！こんなところで優しさ披露しちゃって！！

もっと強く言つてやれよ！！

うるせえこのしゃべる看板くらいいってやれよ…もういいや。

そろそろ本題に戻ろつ。

『今日はクエストを受けにきたんだけど、なにかあるか？』



ってるから!!

『めんど…一日一回配信の紹介所からの情報誌を受け取ることできる機械です。他にもリード同士の通信ができます』

って言うとなれかな??ケータイ電話みたいなやつかな。

てか、前半のめんど…ってちゃんと聞こえてるんだからな!!

『仲のいい人同士でパーティを組んだり、ご飯に誘ったりするときにも使うことができます』

へえー、じゃあ雪菜とかロコとかのも聞いておこうか

『まあ、リードでできることはそれくらいでしょう。防具店にけばあると思いますよ』

それだけわかれば十分だな!!

『さんきゅ!! とりあえずリードっての買ってくるよ!!』

そういつて俺は駆け出した。

やっぱり楽しみでしょ!? NEWワールドでNEWアイテム! テンションあがってくるわ!!

俺はニコニコの笑顔になって防具屋へ駆け出した。

~~~~~

さあ、防具屋に駆け出したわたくしこと柊吉夜。

走ることに20分、未だ店すら見えず途方に暮れております。

なんでかなあー、異世界にきてから俺つてばステータスに方向音痴加わってるのかなあ。

そんなことを考えていると前からオレンジ色の髪の子が歩いてきた。

ロコは指輪をニコニコしながら見ている。あんまりよそ見してる
と危ないぞ???

でも、いいところであつた!!

『ロコー、このあたりに防具屋つてないかー？ リードつてやつ買
いたいんだけど』

するとロコは指輪に夢中で俺に気づいてなかったらしく、ツインテ
ールがぴょんつと跳ね大きな目をこっちに向けていた。

今気づいたけどこいつの目って緑色なんだー。

『お兄ちゃんかあー、びっくりしたよお。でも、お兄ちゃんだから許してあげる』

なんか、お兄ちゃんって言われるのが嫌じゃなくなってきた…どうする、俺…！

『防具屋だったよね、ロコはいま行って来た所だけど、お兄ちゃんが行くならもう一回行く　それにリード買うならいろいろ聞きたいし』

ロコがいつちばーんとか言ってるけど、一番ってなんのことだ？

そんなことを思っているとロコは俺の手を握って歩き出した。

『いこっか』

ロコが嬉しそうに並んで歩く。小さい手で俺の手を握ってる。

なんか恥ずかしいな。

そんなことを考えているとすぐについた。

なんだよ、こんなに近かったのか…。

俺の目の前には緑色の大きな建物が。

もっとコンビニみたいなやつだと思ってたけど全然大きさが違った。

ただ、コンビニの大きさが大きくなったって感じだけ。

ロコはこちらを振り向いて

『はい、防具屋に着いたのです。覚えてね、お兄ちゃん。じゃあリードだったよね、一緒に探そう?』

そう言っつてロコは俺の手を引っ張って奥につれていく。

中にはたくさんハンターと思われる人がいた。

ただ、俺のような緩い表情をしている人がいない。

みんなものすごい真剣だ。

例えるなら、テスト前日の自習時間くらいの真剣さだ。

つてこの言い方だと真剣に見えないかもしれないが、すごい真剣だ。

『なんでこんな緊張した雰囲気なんだ?? もう少しにぎやかでもいいんじゃないか??』

俺の疑問にロコはビックリして、それから周りの人に聞かれていなか確かめていた。

そして、小さな声で

『当たり前のこと言わないでよ、お兄ちゃん。ここは防具を売ってるんだよ? ハンターにとって自分の命を預ける道具を買うんだよ?? 命がかかるものを買うんだからみんな真剣になるに決まってるじゃん。』

そうか、俺の発言が周りの人に聞かれていたら危なかったな。

みんな命を預ける道具を選んでるんだ。

真剣になって当然だな。

『わかつてくれた?? じゃあリードコーナーに行こっか あそこだけは防具とかとジャンルがすごく違うから区切ってるから大丈夫だよ』

少し歩くと白い板で区切られている部屋があった。

その部屋にはハンター以外の人が少ない。

ここはまだにぎやかだな。

やっと落ち着いたあー。

『じゃ、リードえらぼつ 私のは最新型だよあー』

ほらっ と言って俺の目の前に出された髪と同じオレンジ色の機械。

ケータイ電話とサイズあんまり変わらないなあ…。

ただ違うのは画面の大きさだな。

そんなことを考えているとロゴが機械についているボタンを押した。

ガシャン!

そんな音と共に今までのサイズの3倍ほどに開いた。

上下の二つに分かれているその機械は上は液晶、下はキーボードの
ような字をうつスペース。

ボタンを押して大きくなったら小さいノートパソコンみたいだな。

俺が眺めている間にロコはどこかに行っていたようだ。

なぜか走ってきた。

『いいでしょー　これ、慣れると使いやすんだよ？　ボタンの
大きさが押しやすくて。　お兄ちゃんもお揃いにしようよお』

そう言っただ俺の腕にぶら下がってきた。

選ぶのもめんどくさいからいいかなー。

『じゃあ俺もそれにするよ。　買いに行こう。』

俺がそういって

『へっへーん　これ、なぐんだ』

そういつているロコの手には小さな箱が。

『開けていいか???』

うん、とうなずいたのを見て箱を開けると

『おお!!　カッコいいじゃん!!』

俺の手にはロコとお揃いの機械が。

ただし違うのは青色だということだ。

青色、いいねえー。 青と黒と赤は俺の大好きな色だ。

『ちなみに、お兄ちゃんのに私のリード、登録しておいたからね
私が一番最初だけだね』

…まあいいか。

電源をつけてすぐ

ピピピピピッ

という音がした。

俺はリードを開くと

くハンター協会く

この情報はハンター専用の情報サイトからです。

今後は、リードへ届く情報から、クエストを選ぶことができます。

それでは、これからも日々、ハンターとして努力してください。

と書かれていた。

これで俺もクエストを受けられるな。

今日は、ロコと遊ぶか。

買ってもらったお礼も兼ねて。

俺は、自分からロコの手を掴んで、店の外へと歩き出した。

そう、俺はこのとき知らなかった…ロコの番号を最初に登録したために起きる悲劇を…

十五話 命を託す物（後書き）

最近、戦闘場面が少ないと思っているので

もっと増やしたとほづがいい!!

とか

いまのままでもいい!!

など、意見お待ちしております。

それと、もしよろしければポイントもww

十六話 　　く新しい出会いく（前書き）

ケータイからの投稿のため、字が少ないなどの問題もありますが、許してください。

あ、四万以上のアクセスありがとうございます。

そして、評価も嬉しいです。

これからもよろしく願います。

十六話 　　く新しい出会いく

俺は、リードをもらってから皮鎧を選び始めた。

なぜなら、俺は今までそんなものをつけていなかったのだが、ロコが着たほうがいい！ 少しでも死ぬ確率、怪我の確率を減らしたほうがいいと思うからだ。

たしかに、と俺も思った。

と言うより、どうして今まで防具の存在にまで意識が回らなかったのかふしぎだった。

俺ってバカだなあ…。

まあ、武器については影斬丸があるから大丈夫だけだな。

ただ、どんな物があるかは気になるんだけどいまはいいや。

そんな思考を強制的に目の前の防具選びに集中し始めた。

ロコが言うには、近距離でのみ攻撃をするハンターは重い鎧を選び中距離からのヒット・アンド・アウェイ、タイプのハンターは動きやすい皮鎧

遠距離からの攻撃をする人は能力にもよるけどガツチガチの鎧か、鎧を着ないらしい。

それなら俺は遠距離もできるから鎧はいらないと思ったのだが、俺

の戦い方は万能タイプらしい。

近距離でも素早さを活かしてかわしたり防いだり。

中距離からのテレポート。

遠距離からの冷氣。

まさに万能。

だからスピードを落とさず防御も高まる皮鎧らしい。

そして、ロコも皮鎧を使っているので選んでもらっている。

オススメはクロークハーツの皮鎧らしい。

ファンもそこそこにいるらしく価値もそれなりらしい。

ただ、なぜだろう。

俺の目はとても皮鎧とは言えないが、黒色がメインで赤色と紫色のラインの入っている服が気になっている。

なぜ?? と聞かれても答えられないが、気になるのだ。

そんな俺を余所に隣ではロコがクロークハーツの魅力を語っている。

どうやらコイツもファンだったらしい。

俺は気になっている服に歩み寄り、手で触れてみた。

すると体の内からドンっと叩かれたように感じ、これだ。これだ。

と言われている錯覚を覚えた。

『悪い、ロコ。俺はこれにするよ』

『どうして！？ クロークハーツのいいと思うのに…』

なんかロコは泣きそうだ。

『なぜかコイツがいいって思っちゃって。だから、これにするよ、ごめん』

謝ってから頭を撫でてあげる。

目を細めて心地良さそうにしてくれているので嬉しいのだろう。

店主に値段を訊ねたところ、物々交換で手に入ったらしく、誰も買わないのでリードのオマケでいいと言う。

俺は店主に感謝し、その服を着た。

やはりこれにはなにかある。

内側から熱が溢れてくるような感じだ。

今後、俺の命を預けるのにはふさわしいかもしれない。

俺はそう思った。

そして、俺はロコにも感謝し、店を出た。

~~~~~

『なあ、ロコ？ お前はこれあとどうしたい？』

俺は防具屋をでてから訊ねてみた。

すると、ロコはビックリしたような、喜んでいるようなはにかんだ笑顔を見せてくれた。

『えっ！？ このあとも一緒にいてくれるの！？』

『ああ、リードを買ってくれたお礼だ。今日は遊んで明日からハスターとして頑張るよ』

その言葉を聞いてロコの顔からビックリが消えて本当に嬉しそうな顔になった。

可愛らしい八重歯が小さな口から見える。

そして、ぴよんぴよん跳びはね体で喜びを表現している。

体の動きに合わせてオレンジの髪の毛が揺れ動いている。

雪菜は大人の魅力があるけれど、ロコには違った魅力があるなあ…。

『ありがと、お兄ちゃん それじゃーねー。ご飯食べたい！』

お腹へっちゃったよお…とお腹をさすっていた。

そう言われるとたしかに俺もお腹が減った。

店を探してロコと歩いていると

『あーれー？ ロコちゃん！ 久しぶりー！』

大きな声を出して遠くから巨乳ちゃんが走ってきた。

胸がものすごく揺れてすごい景色です。

ロコはその巨乳ちゃんに手を振っている。

近くでみると、水色の長い髪の毛を結ばずに垂らしている。

身長は160くらい。

ものすごい大きな胸。

目はおっとりした一重で口は小さい。

うーん、95点の高得点！

おっとりしてる感じがまたいいっ！！

そんなことを思っていると

『エルー！ 久しぶりー！』

そう言って二人で抱きしめあっている。

ロコが豊満な胸に押し潰されている。

『あー、ロコ？ できたら紹介してもらえる？』

俺は一人放置されているのがさびび…苦しくなったので声をかけた。

…ホントに寂しかったわけじゃないよ？

寂しくなんてないんだからっ！

『あ、ごめんねお兄ちゃん。こっちはエルーだよ！ エルヴィスだからエルー エルーって呼んであげてね』

『よろしくー！ ロコってお兄ちゃんいたんだっけー？』

あれー？と首を傾げている。

やっぱり可愛いなあ。

『違うよ ホントのお兄ちゃんじゃないけど、ロコのお兄ちゃんかな』

なんか恥ずかしいぞ

『名前はき夜って言うんだ、よろしく』

俺は手を出して握手しようと思った。

するとエルーは顔を赤くして

『よろしくですー／／／／』

握り返してくれる寸前

『エルー！ お兄ちゃんのこと好きになっちゃダメだよ！？ お兄ちゃんはおたしのなんだからっ！』

俺の腕をつかんできた。

『むー、ロコちゃんのものじゃないでしょー！ 私もー！』

俺の腕に抱きついてきた。

…胸がすごいです。

「大きさ一つでむにゅんむにゅん」

これ、子供に伝えよう。

『あーそーだ！ いま明日のクエスト一緒にいってくれる人探してたんだあー！ ロコちゃんたち一緒にやるー？』

エルーはしがみついたまま言ってきた。

『ロコはいいよ、お兄ちゃんは？』

んー、まあいいかなあ。

それならこのあとは雪菜にリード聞いて来ようかな

『ああ、構わないよ』

すると二人は

『頑張るつね、お兄ちゃん』  
『き夜さん』

と言った。

十六話 　　く新しい出会いく（後書き）

ポイントが入っていることでやる気が出た作者です（笑）

現金な作者（笑）

ポイントまたよろしくです（笑）

十七話 方向性（前書き）

頑張つてかくことができました。

しかし、少し少ないのと、長くできなかったことで脳内に描かれていた戦闘シーンが書けませんでした。残念です。

ポイント、アクセスとも非常に力になります。

これからもお力をお貸しください。

十七話　　く方向性く

あのあと二人に買い物に付き合わされ、町の人からは変な目で見られてしまった。

なぜなら二人とも俺の腕に抱きついたまま町中を歩くからだ。

俺はものすごく恥ずかしかった。

しかし、手を離してもらおうと説得しても離してくれなかった。

そんな感じで夕暮れまで三人でいた。

みんなで夕食を食べようという話になったところで

『悪い、俺このあと用事あるんだ。　だからまた今度な』

この言葉でお開きとなった。

エルーにリードを奪われ、エルーの名前も登録されていた。

『これで、いつでも連絡できますねー　今度は二人きりですよー  
『?』

唇の前で人差し指と中指を立てていつている。

ものすごく色っぽい。

『お兄ちゃんはロコのだって言ってるじゃん!! ダメだよ!?!』

ロコとエルーはまた言い争いをしているので俺は二人を放置して雪菜の元へ向かった。

~~~~~

『き夜さん? これはどついでとどついでしょ?』

目の前には雪女もとい雪菜がいる。

なぜこんなに怒ってしまったかという俺にもわからない。

わかっているのは俺のリードを見た瞬間

ピキピキッ

机の上の花や水が凍りだしたのだ。

うーん、ドライフラワーみたいだな。

不覚にもそんなことを思ってしまった。

『どつしてもう女の方の名前が入っているんですか!?! 私を一番

にしてもらいたかったのに…』

そんなことだったのか!!

それなら…。

『じゃあ、雪菜を一番にするよ。それじゃダメか?』

登録のし直しはめんどくさいからな、これでもいいかな??

『あう／＼／＼ それでいいです／＼／＼／＼』

顔を赤くした雪菜はそれで許してくれた。

すると部屋を覆っていた冷気が一気になくなった。

ふう、一安心だな。

俺は一息ついた。

その後は雪菜も落ち着いて、ご飯作るから待っていてください、と俺をリビングにおいて台所に行ってしまった。

キッチンでは雪菜が ふっふん と鼻歌を歌いながら料理を作っている。

美味しそうな香りでリビングが満たされたところで俺はキッチンを見に行ってみた。

エプロン姿の雪菜がとても楽しそうに料理を作っていた。

やばい、可愛すぎる……。

『あれ？ 吉夜さんどうしたんですか？』

雪菜は俺に気づき声をかけてきた。

『ああ、手伝えることあるかなと思ったんだけど……雪菜が可愛
いから見とれてた』

……素直に言っけしもうた……どうしよう、俺みたいなやつに
言われて怒らないかな！？

もう！！ 俺のバカ！！

マイ マウス イズ フール！！

『ふえ！？／／／／／／／／／／ えーっと……ありがとございま
す／／／／／／』

顔を真っ赤にしてほっぺを押さえている雪菜。

包丁！！ 包丁！！ 危ないから！！ こっち向いてるからね！？

『でも、気持ちだけで十分ですよ、吉夜さんはお客さんです。リ
ビングで待っていてください』

そう促され、俺は素直にリビングに戻った。

ソファでゴロゴロしていると雪菜が料理をもって戻ってきた。

元の世界ではみたことの内容な料理だが、とても美味しいであろうことは以前の料理でわかっている。

『いただきます』

二人でそういうと食べ始めた。

うん、やっぱり美味しい。

俺は話すことはあまりせず、食べることに夢中になっていた。

気づけば全体の三分の二は俺が食べてしまっていた。

食べ終わり、二人で今後について話した。

俺はしばらくロコたちとランクを上げることにした。

雪菜も、手伝えるクエストがあれば手伝いたいと言っていたが、雪菜の力を借りたらDランクのクエストなど簡単にできてしまうので遠慮させてもらった。

ただ、雪菜と同じランクになったら雪菜も加わると言っていた。

そんな感じの会話を済ませ、今日のところは帰る、ということになった。

俺は宿へ戻る途中、ずっと考え事をしていた。

いまの能力を最大限に生かし、さらには戦いの幅を広げる方法だ。

俺には二つの能力がある。

一つ目は、他人の能力をコピーすることのできる能力だ。

二つめは、能力になにかを付加することのできる能力だ。

俺は、二つ目の能力に気づいたとき、試したい、試してみたいと思っていたことがある。

それは能力同士をくつつけることだ。

瞬間移動と冷気を操る能力、この二つをくつつけるとどうなる??

簡単だ。

氷柱ができる。それが突然敵に刺さるのだ。

これができたら戦いの幅はとても広がるだろう。

他の能力もコピーすれば、さらに強くなることだろう。

考えがまとまってきたところで宿についた。

詳しいことは明日でもいいな。

それとエルーの能力も使えそうならコピーさせてもつことにしようかな。

んー、そう考えたら今日は早く寝て明日に備えたほうがいいかな。

『おお、久しぶりじゃのう。ハンターはどうじゃ？』

壱夜が入ってきたと同時にコロバぁが言った。

しかし、壱夜は無反応で部屋へ戻っていった。

このとき壱夜は明日のことで思考がいつぱいで気づかなかったのだ。

部屋に戻り、すぐに意識を手放した壱夜。

目が覚めたときに宿の外で寝ていたという後日談。

さらに、その視界の中にコロコとエルーがいたという余談。

十七話 方向性（後書き）

誰か!!

我にアドバイスをww

初心者が初心者なりに頑張っているのですが、なかなかボロボロです。はい。

あ、ポイント、これからもよろしくですw

目指せ200PT!!

目指せ10万アクセス!!

十八話 　　く漆黒く（前書き）

まず、昨日は更新できなくてすみませんでした。

そして、6万アクセス&200PT越え！！

ホントに嬉しいです！！文も下手。アイデアもしょぼい自分の小説が…そう思うと自信もつくし、力にもなります。

これからも作者、作品ともどもよろしく願います。

駅伝シーズン、大変です。

明日も走りこみです。

疲れてしまったら更新できませんが、もしそうなった場合は許してください。

十八話 　　く漆黒く

…目を覚ました俺の視界に冷めた目でこちらを見ている少女が二人。少しずつ意識が覚醒してきた俺はこの二人の少女が誰か気づくことができた。

『『どうして外で寝てるの？』』

二人の質問が重なった。

まあ、エルーとロコがそんなことを思うのも当然だろう。

俺の頭の中にもどうして外で寝ているのだろうか？という疑問が浮かんだのだから……。

昨日はたしかに自分の部屋で寝たはずだ。

宿にもどって、布団に入ってちゃんとネタヨ??

ウン、ハヤデネタヨ?

そんなことを考えながら二人の目をしっかりと見たとき、俺は気づいた。

二人の目の冷め加減が半端ないことに……。

俺はその目を知ってるぞ!!

俺の母さんが…酔っぱらった父さんが帰ってきたときに向ける目だ
！！

さらに言えば、帰りの電車で酔ったおっさんに女子高生が向ける目
だ……。

俺はそんな目を向けながら沈黙している二人に耐えられなくなり、
弁解を始める。

さあ。いまここに俺は宣言しよう！！

俺VSロコ&エルーの口撃合戦の開戦を！！

~~~~~

へっぽこ勇者き夜

HP 45

MP 8

武器 枕

防具 布団

エルー

HP 39

MP 56

武器 クエスト依頼書

ロコ

HP 46

MP 4

武器 短剣

防具 俺の朝ごはんと思われる物

壱夜の口撃。

『あーっと二人とも?? 俺は外で寝たわけじゃないんだぞ??  
昨日は部屋の布団でちゃんと寝たからな?』

が炸裂!!

しかし、エルー&ロコのMPを3使いカウンター

『…へー』』

信用を失ったという事実には壱夜は16のダメージ。

ロコの反撃

『あーあ、お兄ちゃんに朝ご飯作ってあげたのに…:エルーと食べよ  
うかなあ…:』

壱夜は10のダメージ。

『じゃあエルー、今日は俺とクエスト行こうな』

はいキタアアア！！ これロコダメージ受けるんじゃない。。。

『うっんー、吉夜さんみたいに外で寝ちやうよーな人と組むのなんて恥ずかしい』

……俺は9999のダメージを受け、息絶えた。

『お兄ちゃん？』 『吉夜さんー？』

返事がない、ただの屍のようだ……。

そのあと二人に慰められ、どうして外で寝ていたのか宿に戻り事情を聞いたところ

『おぬし、昨日わしのこと無視したじゃろ？ 仕返しじゃよ』

まさかの仮眠具OUTならぬカミングアウト。

それを聞いたエルーとロコは俺に謝ってくれたので、この話は一件落着した。

~~~~~

『それで今日はどんなクエストをやるんだ？』

俺はクエストに行く、としか聞いていなかったので質問してみた。

『あーれー？ 喜夜さんのリードに送っておいたはずなんですけど
ー…』

俺はすぐリードを開く。

あ、ホントだ。 昨日の夜にメッセージが届いている。

『いまから見るんですかー?? それならー、馬車の中で説明しま
すよー』

そついつて馬車に乗り込むエルー。

それに続くロコ。

さらに続く俺。

てか、いつ馬車きたんだろう。

もしかして、俺VSロコ&エルー戦からいたのかな…はずかしっ
／
／

一人で悶々としているとエルーが説明を始めた。

『今日の依頼は討伐です。 討伐対象はドーエンです』

『ドーエンってなんだ??』

俺は魔物についての知識は無に等しいので当然の疑問だ。

『ドーエンはー、大きな鼻に二本の角を持ってー、突進してくる茶色の魔物のことだよー』

…いまの説明だと猪みたいなやつということしか伝わってこない。

エルーに聞いたのは失敗だったか。

ロロを見ると、こちらに気づき

『行けばわかるよん』

当然じゃん…。

討伐前に敗北感を味わってしまい落ち込んでいる晝夜をよそに馬車は目的地へついたようだ。

俺たちはドーエンを探して歩き回った。

歩きまわったと言っても目的地が前回と同じ森だった。

見渡す限りの木、木、木。

このままだとまたアッシュに会ってしまふ。

『目撃されたのってどこなんだ??』

エルーは んー と言ってから

『この辺だよー?』

笑顔で言うげどさ、着いてたならもつと早く言ってよ！！

少し警戒しなければならぬ。

俺は影斬丸を出現させ、右手を柄に触れさせておく。

すると

『お兄ちゃん！！ エルー！！ こつちに二頭いるよ！！』

俺はすぐそちらに駆け出した。

エルーの方を見ると手を下に向けて何か唱えている。

『汝、血塗られた存在となりて我が敵を打ち崩さん。 汝、災厄から我を救う者。 我と血の契約を交わせし者、我が呼び声に答えたまえ。 我が敵に命の審判をくだしたまえ。 我が声が聞こえたなら、ここに姿を現せ。 我の矛、我の盾、我の友。 出でよクロフ！！』

エルーの周囲に黒い煙のようなものが集まり始め、それらがゲートのような物を形作る。

やがて、はっきりとしたゲートが完成し、奥から低いうなり声が聞こえ始める。

ゲートに亀裂が入り、そこから鋭い爪を持った手が現れる。

少しずつ、少しずつ亀裂が広がっていく。

空間が音を立てて裂けていくような感じが伝わってきた。

そして、亀裂が一気に裂けて中から黒い者が飛び出してきた。

『なんだあれ…。』

俺は現れた者を見て言葉を失った。

『お兄ちゃんはクロフを初めて見るんだよね。私も最初は怖かったけど、今は少しなれたかな』

ロコはそんなことを言っていてドーエンの方に向き直り、再び警戒を始めた。

クロフ、と呼ばれ、召喚された者はまるでドラゴンだ。

小さい時、ゲームの中でカッコいい、そんなことを思っていたドラゴン。

いざ目の前にすると身体がすくんでしまう。

鋭い爪と牙を持ち、深紅の鋭い瞳。

真っ黒な鱗。それとは対称的な真っ白な腹部。そして二本の角。

そして、翼を広げると、すべてを飲み込んでしまうのではないかと錯覚するほどの黒。

漆黒のドラゴン。そんな言葉がぴったりだと思った。

動けずにいる俺に

『吉夜さんごめんなさい。怖がらせなくなかったんだけどー私の能力は召喚なんだー』

『私の精神を原型として形作られた存在らしいんだー ちょっと怖いかも知れないけど、クロフとも仲良くしてねー』

そういつてエルーはクロフの背中に乗る。

15メートル程はある背中が翼を広げ一気に空へ飛び立った。

俺の身体を吹き飛ばすような風とともに舞い上がったクロフは上空を旋回し、ドーエンに攻撃をしかけようとしていた。

今は動揺している場合じゃない!!

俺は気合を入れなおして、再びドーエンたちの方に向き直った。

十八話 　　く漆黒く（後書き）

意見・感想、ポイント、アクセス。
この三つの柱が作者の力ですww

みなさん、どうかよろしくお願いします!!!!!!

十九話 〽️戦闘〽️ (前書き)

久々の戦闘。

戦闘シーンを文字に表すことが大変苦手な作者でございますW W

それと7万ヒット感謝です!!

ありがとうございます。

十九話 　　く戦闘く

いまは怯えている場合じゃない!!

討伐すべき魔物が目の前にいるんだから。

ドーエンたちに向き直る。

5メートルほどの猪だ。うん。

猪にしか見えないや。

油断している俺に向かって一頭のドーエンが突っ込んできた。

速いっ!!

間一髪で俺は横に転がり回避する。

ズドっ!!

俺の後ろの木にドーエンの角が突き刺さる。

しかし、その角が刺さった場所から木が折れた。

二頭いるから一頭を引き離して戦った方が楽だな。

『ロコ!! エルー!! 俺がこいつをひきつけるから、二人で一頭を倒してくれ!!』

俺はそう言い木々の間を疾走する。

木を縫うように走る俺の後ろをドーエンが木などないように駆けてくる。

後ろから恐怖が近づいているのがわかる。

ある程度離れたところで俺はドーエンに向き直る。

そして、突進してきたドーエンを回避し、すぐに体勢を整える。

ドーエンは一度木に刺さり、木をなぎ倒しましたこちらへ向かってくる。

それをまたかわす。今度は影斬丸を構え、突進に備える。

しかし、ドーエンは突進してこない。

地面を足で引掻きこちらの様子をつかっている。

…少しは知能もあるのか。

こいつ相手にうまく組み合わせることができたなら…。

俺は影遊を重視した戦闘に切り替えることにした。

氷柱を、^{アイシクル}雷を纏うイメージを持ち作り上げた。

……あれ?? そこに現れたのは普通の氷柱だった。

しかし、刺さったら電気が…と思いドーエンに向けて飛ばす。

ドーエンはそれをあっさりよけながらこちらへ突進してきた。

俺は再び横に転がりよけようとする。

だが、ドーエンは甘くなかった。

なにっ!？

俺がいた地点とほぼ同位置でストップし、こちらに向き直り角を俺に向かって振り上げる。

ガギンっ!!!

影斬丸と角とがぶつかり合い、火花を散らす。

それと同時に俺の腕から身体全体に鈍い衝撃が広がった。

まずい、この威力がもし防げずに一発でも当たったら、どうなってしまうのだろうか……。

俺は距離をとり、再び影遊を試みる。

今度は氷柱が爆ぜるイメージを持ち作り上げる。

俺はドーエンに向かってそれを飛翔させる。

ドーエンに避けられる刹那の瞬間、氷柱が爆発にドーエンに氷の破片を刺す。

ブオオオオオ！！！！

痛みに悶え、苦しそうに血を流しながら鳴き声をあげるドーエン。
爆ぜることはできた。

とりあえず、今のところはこれで十分だ。

俺は二本の氷柱を作り、左の氷柱は右に、右の氷柱は左に変化することを付加する。

そして、再びドーエンに放つ。

ドーエンは当たらないと判断したのか、こちらへ突っ込んでくる。

しかし、ドーエンの横を過ぎようとした瞬間、二本の氷柱がドーエンの腹部と眼に突き刺さる。

眼に刺さった一本がドーエンの視力を奪ったのだろう。

ドーエンはいろんな方向に向かって突進している。

俺の方向にも来るが狙ってはいないだろう。

見えてないなら後は楽だな。

俺は直線の動きしかないドーエンの突進を避け、影斬丸で切り裂く。

ドーエンは小さな声とともに地面に沈み込んだ。

『ふう……』

俺は安心したのかため息が漏れた。そして、影斬丸を手から消した。

そして、倒したドーエンに近づき、その姿を見る。

その瞬間……！

ドーエンが最後の力を振り絞り、こちらに角を振り上げた。

まずい……！ もう影斬丸は消してしまった。今から出しても当たってしまう……！

俺は少しでもダメージを減らそうと眼前に手を組み、防御を試みた。

眼をつむって衝撃に備える……おかしい、いつまで待っても衝撃が来ない。

俺は意を決して防御をとき、目を開く。

目の前には血を流し、倒れているドーエン。

息もしていない。絶命しているようだ。

俺は、魔物との命を懸けた争いを舐めていたことを改めて気づかされた。

倒したドーエンに感謝の念を抱きつつ、俺はロコとエルーの方に向

かった。

~~~~~

俺は二人のコンビネーションに驚いている。

いま、目の前には青い炎が広がっている。このあたりだけ木や草がほとんど燃え尽きている。

ロコが瞬間移動でドーエンに的を絞られないようにしつつ、切りかかり、また逃げる。

そして、ロコを狙ってドーエンが突進を仕掛けるところに上空から青い炎が流星のように降り注ぐ。

ドーエンはそれを食らって動けない。そこにロコが切りかかり再び流星が降り注ぐ。

すでにドーエンの身体は血だらけになり、表面は黒こげになっている。

倒れるのも時間の問題だ。

ドーエンにほとんど攻撃させず、翻弄している。

再びすさまじい流星が降り注ぎ、土煙で周りが見えなくなる。

土煙が晴れたところに立っていたのはロコだけだった。

わずかな戦闘だったが、ドーエンなんてたいした敵ではないという  
ような戦いぶりだった。

「俺も頑張らないと…」 心の中でそんなことを思っていた。

すると、向こうから

『お兄ちゃんも倒したんだ 一人で倒すなんてすごいじゃん』

ロコが無邪気に笑っている。

『ありがとう。 ロコもすごいな』

そういつて頭を撫でてあげると嬉しそうにしてる。

『ロコちゃんーん！！ ずるいですー！！ 杏夜さん、私も撫でてく  
ださいー！…！』

さっきまでいた黒龍は姿を消し、エルーがこちらへ走ってきていた。

『撫でてくーださい』

エルーがニコニコしながら俺を見ている。素直にかわいいと思って  
しまう。

『エルーも頑張ったな』

俺はエルーの頭も撫でてあげる。

すると、心地よさそうに目を細め、まるでリスのようなカワイイ顔に変わっている。

『エルー!! お兄ちゃんは私のもの!!』

『違うもーん、吉夜さんはエルーのだもんー』

また、言い争いが…。

『『それなら…』』

…嫌な予感が

『『どっちがいいですか!?!』』

やっぱりー!ー!ー!ー!

ここの返答はドーエンとの戦闘より、重要だ…。

『えー…っ…』

俺は悩む。 どうする俺!? どうする作者!?

そんなことを考えていると…

『お前はどちらの者でもないよ、自分のことは自分で決めなさい』

天から声が聞こえた。 まあ作者さんが教えをあげただけだ。

そうだな… 昔夜はそう思って

『俺はどちらか一人だけのものじゃないよ、だから仲良くしてね』

そういつてやると

『…はい／＼／』

二人とも納得してくれた。

十九話 　　く戦闘く（後書き）

なかなか頑張った！

これから眠りに入りますww

おやすみーzzz

二十話 〱 召喚〱 (前書き)

お知らせがあります。

作者が一話から読みなおしたところ、ものすごく恥ずかしくなりました。

なになにって文章の下手さにww

最近は勉強が活かされてきたのかましになってきたけど…:…という気のせいww

なので一話から訂正を加えていきたいと思います。

話は変わりませんが、文の量が増え、内容も濃いものとなると思います。

そついう事情もありますし、テスト前と言う事で次回の更新は12月5日を目標としています。

お楽しみに!!!

二十話　　く召喚く

いま俺はエルーと二人、草原に来ている。

いや、デートとかじゃないんだよ??

エルーの能力について聞かせてもらったり、俺の能力について話したりしていたんだ。

エルー曰く、エルーの能力名は精神の顕現サモンソウルと言っらしい。

エルーは俺の能力について聞いた途端

『私の能力もコピーしてみますかー??』

と言ってくれた。

なんでも理由は

『この能力を使うたびに私のこと想ってもらえるじゃないですかー』

うん、ものすごい恥ずかしかったけど、それと同時に嬉しかった。

だから俺はすぐにコピーさせてもらった。

刀の柄には四色目となる、紫色に輝く石がびたりとはまった。

俺の刀にはこれで

《心透》

《瞬間移動》

《氷の指揮者》

《精神の顕現》

この四つがコピーされている。

そろそろストック的に厳しいなあ…。

この中で俺にとってあまり必要なのはあれかなあ……………

『なあ、精神の顕現ってどうやって発動したらいいんだ？』

俺はさっきから発動しようとしてるんだけど、なにもできない。

刀に手を添えて一人でうなる少年…周りからみたらなかなかシユールな画だな。

うん、改めて考えると恥ずかしいぞ。

『私のときはですねー、能力がわかってから強さのイメージをずっと考えていたらいつの間にかー、クロフがー、現れちゃってましたねー』

うんうん、と首を頷きながら思い出しているエルー。

でもね、一言言っただけいいか??

『参考にならねーよ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

あ、いかんいかん。

つい怒鳴ってしまった。

うう…と大きな目に涙を浮かべて上目遣いのエルー。

ものすごい悪いような気がしてきた。 正当ギレのはずなのに…。

『すまん、エルーつい怒鳴っちゃった』

すると、エルーの目から涙が消え、キラキラとした大きな目が曲線を描いてこちらに微笑んでくれた。

『いいえー、だいじょうぶですー』

これで、ひとまず安心。

『エルー先生!! それじゃあ僕は強さのイメージを固めればいいのですか??』

『晝夜くん!! いいですかー? 先生は強いものと言われてペンギンさんを思い浮かべていましたー。それでも現れたのは漆黒のドラゴンですー。つまり、強さのイメージは関係ないということですよ!』

えへっ と言いそうな顔でエルー先生はとんでもないことをおっしゃった。

……それならエルーが強さのイメージ考えたのって無意味じゃん。  
しかもペンギンで…。

あう…そんな目で見ないでー？ とつぶやいてるエルーは気にしない。

『あー！！ 思い出しましたー！ 最初にクロフに現れたときは、カッコいい呪文唱えたら出てくるんじゃない？』って思って呪文を唱えた日ですー！！』

つまり、俺も呪文を唱えればいいと？？

『だからき夜さんも呪文を唱えたらいいですー？？』

呪文かあ…。

『なんか、ダサイ呪文を毎回召喚の度に唱えるのヤダから考えさせてくれ』

『そのことなんですけどー…召喚呪文は一回目はなんでも大丈夫ですー。 召喚したものと契約を交わすときに呪文を唱えるんですー。 その呪文が召喚されたものとき夜さんのキズナになります。 私の唱える呪文は私とクロフのキズナです』

そういつて胸に手をあて、ぎゅっと握っているエルー。

んー、胸がプルルンってした方に目がいつてしまったなんていえない…。

でも、それなら…。

『最初の呪文は適当でいいんだな?? それならすぐ決めるから離れて見ていてくれ』

そういつてエルーを離れさせる。

心を落ち着かせる。

さっきまでの草のざわめき、月光の輝き。　すべてを心から追い出し、集中力を研ぎ澄ます。

研いで、研いで、研いで。

細く鋭く、刀のように。

折れそうで折れない。

鋭く、鋭く、鋭く。

そして、俺はなにかに呟きかけるように、それでいて強さを感じさせるような声で唱えた。

『俺の道を貫くために力がある。俺の道を通す力を。俺の道を塞ぐ物には裁きを。俺の声が聞こえたなら答える。俺の声が聞こえたのなら現れる。俺の心を顕現するものよ。』

俺は、呪文ではなく、俺の想いを、願いを唱えていた。

これでも答えてくれるのだろうか。

『 汝の声、たしかに聞こえたぞ。 我が答えよう、 汝の声に』

そう聞こえた瞬間、目の前に眩い光が降り注ぐ。

優しさを感じさせるような光が、夜とは思えないほどの輝きを世界に与える。

俺を、エルーを、草を、草原を、すべてを、世界を包みこむような錯覚を覚えるほどの光が降り注ぐ。

そして、少しずつ光が収束していく。俺の視界も辺りが見えるほどに戻ってきた。

俺の視界には四つの白い翼を持った少女がいる。

……エ。 ボクノセイシンガアラワレルンダヨネ??

目の前の少女をもう一度見る。

十二、三歳の淡い紫色の服を纏った幼い少女がいる。

小さな顔。 ブラウンの長髪。 少し鋭い目。 とても可愛く、そして綺麗な子が立っていた。

いや、正しくは”浮いて”いた。

その少女は背中に四つ翼があった。まるで天使だ。

おれ、ついにダメなコになっちゃったのかな…母さん。

俺の心を表すものが少女？ 隠れ口リだったのか俺…。

一人嘆いていると

『あんたが私を呼んだの？？』

少女はこちらに目を向けて、鋭い声で聞いてきた。

『あ、ああ』

へーっと言って俺を見て言う。

そして

『あんならまあいいわ。私に名前をつけなさい』

名前？？

『名前って俺がつけるのか？？』

名前って初めからあるんじゃないの？？

『つけるに決まってるでしょ？ 名前をつけることで契約をして、呪文によって私とあんに道をつなげるのよ』

当然のように言われてもなあ…。

『どんな名前がいい？？』

一応要望も聞いておこう

『あたし?? あたしは綺麗な名前がいいわ』

んー、あ！ この花の名前は…。

『じゃあ蓮れんってどうだ??』

蓮、蓮…と何度も呟いている。

『意味とかってあるの??』

『俺のいた国には蓮はすの花っていう花がってな?? その花は泥の中に咲くんだ』

『そんな花!!!』

そういいかけた蓮の声を上から塗り替えるように言う。

『でもな?? 泥の中に一輪。綺麗に咲く花って美しくないか?? 泥に負けず綺麗な花を咲かすんだ。周りなんか関係ないって感じに』

だから…

『蓮にもそういう風になってほしい』

おし!!! いいこと言った!!!

第一印象ばつちり!?

すると蓮は

『あ、ありがとうっていつておくわ』

蓮は照れたように感謝してくれた。

『俺はき夜だ。 よろしく』

『き夜ね、よろしく。 それじゃ、ちゃちゃっと契約の言葉を』

そう言っつて蓮は俺の手をとり跪く。

『我が名は蓮。 汝の呼びかけに答え、共に道を切り開く者。 こ  
こに契約を』

そついつと蓮は俺の手の甲に口付けをした。

すると、俺の手が輝く。

蓮が現れたときと同じような輝きだ。

しかし、すぐに収まっていく。

そして、俺の手には小さな丸を四つの翼が包みこむような絵が残っ  
ていた。

『はい、これで契約完了!! 手の甲のやつは紋章だから消えない  
わ。 呪文は頭の中に流れ込んできているわよね??』

『呪文？？ 我は…』はい、ストップ。　いまあたしがいるでしょー！？　いま唱えてどうするのよ』

『すまん、口が自然と…』

そう、わざとじゃない。

自然と口が呪文を紡ぎだしてしまった。

呪文は契約と同時に俺の頭の中に流れ込んだようだ。

しかし、俺の心ってこんななのかな？？

『なあ、蓮って何？？』

あ、直球すぎた。　なにこのアバウトで直球な質問。

リトルリーグの子供にもホームラン打たれちまうよ。

メジャーだったらキャッチャーミット届く前にバッターが

『H A H A H A ! ! !』

って笑って場外になりそうだ…。

『んー、そうね。　この世界では天使って感じかな？？』

…パードウン???

『天使よ、天使』

信じられない!!!!!!

なぜかって???

蓮の性格が天使ってことがだよ!!!!!!!!

『なんか失礼なこと考えてない???』

『ウウン、ソナナコトカンガエテナイヨ???』

錬はジト目でこちらをにらんでいる。

が、疑うのをやめたのか、元に戻った。

あ、蓮のことばかりでエルーを忘れてたよ。

二十話 〱 召喚〱 (後書き)

記念すべき二十話書き終えましたあ!!!!!!

今度のテストもシングルナンバー狙ってやるう!!

PTもうすぐで300!!ホントに嬉しいです。

しかし、お気に入り、感想があまりなく、寂しいような悲しいような…

めげないで頑張ります!!

あ、でも自分の書いた小説を読んでもらえるだけで嬉しいので頑張れます!!

二十一話 天使（前書き）

更新、遅くなり申し訳ありません。

量は少ないかもしれませんが、楽しんでいただけるとありがたいです！！

二十一話 天使

『ううー…私、置いてきぼりなのですー???』

俺のとなりから声がした。

はっとなって振り向くとエルーがうずくまって目をぐるぐるさせている。

やばい、蓮との会話に夢中になりすぎてた。

『ごめん、エルー。蓮、この人はエルーだ。エルー、こいつは蓮だ』

すると、エルーは顔をあげてニコニコしている。

まあ、機嫌は直ったのかな??

『蓮よ、よろしく』

『エルーですー、よろしくねー』

そういつて二人で手を握りあう。

うん、これで大丈夫。

『じゃあ、みなんでお互いのことをよく知るために質問タイムにしようか!!--!』

第一回、質問大会！！

『それならあたしからエルーに質問させてもらおうわ』

蓮、積極的に行くのはいいことだぞ！！

エルーはやっと会話に入れたので嬉しそうだ。

これで、みんな仲良くなれる。

俺のモットーはラブ&ピースだからな！！…まあ、いま考えたんだが。

『はい、どうぞー』

『んつとね、じゃあ言うね?? えつと…えつとね? どうしたら…エルーみたいに大きな胸になれるの??』

蓮は恥ずかしそうにうつむきながら自分の胸の前で手をぎゅっと握っている。

控えめな胸だが、決して小さくないぞ、なんていえない。

『ふえ!? え、えーつとー…よく寝て、よく食べて、よく寝ることかなあー??』

なんか疑問系。でも、俺には気になったことがあった。

蓮も気になったのだろう。互いに目配せをし、そして

『『どれだけ寝ることに重点を置いているの(よ)！！...!』』

見事にはもった声。

『ぐすつ…だつてー…だつてえー…』

エルーが本当に泣きそうになってしまった。

あわてて俺はエルーの頭を撫でる。

嬉しそうに手の感触を確かめているエルー。

どれだけ、幼い精神年齢なんだ…まあ、それが可愛いんだけどな。

しばらくすると、笑顔になったけど、目の上にたまっていた涙がこぼれてしまった。

俺はそれを指先で拭ってあげた。

『ありがとーですー』

エルーは本当に嬉しそうにしてくれた。

でも、今度は左隣から寒気が…。

振り向くと悪魔が…いや、天使なんだけどね??

一瞬悪魔に見えたよ。

そして、ぶつぶつ、あたしだって寝てるのになんで…とか

食べる量がいけないのかな??

なんてつぶやきが聞こえてきた。

どうやら思考に没頭しているようだった。

そんな蓮を見てみると、蓮が突然顔をあげた。

『エルー、勝負しましょう!!!』

『は???』

え、コイツナニツチャツテンノ???

イマナンテイッタノカナコノテンシサン。

『私とですか???』

エルーは驚きながらもちゃんと返答していた。

『そんなわけではないでしょう?? エルーの召喚獣のクロフとよ!!!』

アラーーーー奥さん聞きました??

このお嬢ちゃん、クロフちゃんに勝負を挑んでるみたいですけどお  
…。

するとエルーはしばらく悩み

『クロフがケガをしたり、蓮さんがケガをしたときに治すことができるならいいですよ?』

そう答えてくれた。いや、答えちゃった…。

『治すなんてできるわよ、天使を舐めないで』

蓮は治せるといったのでこれは勝負することは確定だろう。

あ、そうだ

『どうして蓮はエルーがクロフを召喚できることを知っているんだ??』

俺も、エルーもクロフについて一回も言ってなかったが。

『そんなことね?? 召喚されるときにあたしのご主人様はどんな人なんだろうって記憶覗いちゃった』

語尾にてへってつきそうな感じに言われた。

しかも、ウィンク付き。

んー、ヤバイなあ…。

あ、なにがヤバイかは言えないよ!?

でも…

『俺にプライバシーはないんかい!!!!!!!!!!!!!!』

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

俺の怒り爆発!!!!!!

エルーは驚いて飛び跳ねてしまった。

しかし、蓮は気にせず

『そんなこと気にするなんてちっちゃいわね。もつと器の大きなご主人様になつてくれなきゃ困る』

そう言つてほっぺをプクウッと膨らましている。

あー、これじゃダメだ!!

怒った気にならない!!

そして、お互いに黙り込む。

エルーは気まずそうにしていた。

そして、夜の闇と同じように沈黙に支配されそうになったとき、エルーが声を発した。

『それでは、クロフを召喚しちゃいますねー』

うん、沈黙をとんでもない感じでぶった切ってくれた。

そういつてエルーは呪文を唱え始める。



右手には光輝く真っ白い矢。

左手には今にも飲み込まれそうな真っ黒な弓。

そして、それを持つ少女。

漆黒と、純白。この二つを手に持ち、少女は微笑む。

『早く来なさいよ。 躡けてあげるわ』

そういつて、輝く矢を漆黒の弓にかける。

ピンと張った紅い弦に、矢を引つ掛ける。

滑らかに、それでいて力強く引き絞り、そして

『早く来なさいって言ってんじゃない!!』

手を離れた。

矢は光の道をつくり、糸でつながっていたかのように、黒い門に突き刺さる。

バリんっ!!!!!!

ガラスが割れるような音がした後、中から黒い何かが飛び出した。

『ギヤアアアアアアアア!!!!!!!!!!!!』

『やっと出てきたじゃない』

我慢して、やっとおもちゃを手に入れたような無邪気な笑顔でそう  
いった。

そして、蓮は空に向かって、翼で風を押しように飛び出した。

二十一話 天使 (後書き)

昨日はここまでをもっと読み応えのあるように5000字くらいで書いて、

さらに、戦闘シーンまで書いたって言うのだ…。  
悲しすぎる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2461i/>

---

本から始まる新たな世界

2010年10月11日05時17分発行